確乎集 九

和書門
類 九〇六九
號
函
架
冊 一二

内閣文庫
和 九〇
函 一一
架

内閣文庫
番號 和 9069
冊數 12 (9)
函號 210 40

国立公文書館
National Archives of Japan

こんにゃく

蒟蒻コンニヤク 倭名抄ニコニヤク多識篇同シ元升曰今俗ニコンニヤクト云

うど 同日

獨活ウド 元升曰外國ニハ食セサルニヤ食物本草ニ是ヲ載セス吾人古ヨリウドヲ食ス西國俗ニ土中ニテ芽ヲ生ヤシメルヲホリ取テウド、イヒ苗生ニテ數寸ナルヲトセントヲ云土前ノ義ナリ稍長ニテ少シ枝葉アルヲ鹿好テ食ス故ニ名ツケテシカトヲ云

春菊 同日

元升曰本邦ニ春菊アリ大明ニハコレナキニヤ本艸綱目ニ夏秋冬ノ三種

ヲ載テ春菊ハナシ

野菊　同日

本艸ニ苦薏ト云ハ野菊也不可食

うこぎ木　同日

五加皮キウコ倭名抄ニムコキ多識篇又云ウコキ元升曰吾人此ノ葉ノ嫩キヲ取テ蔬茹ニシテ食ス甚ヨシ或ハ茶ニシテ用フ

枸杞　同日

枸杞倭名抄ニヌミクスリ俗ニクコ多識篇オナシ元升曰此ノ葉或ハ蔬茹ニシ或ハ茶ニス吾人常ニ用テ皆ヨシ

さゝ栗　同日

元升曰西國俗ニサヽクリト云小々栗ト

カケリ

橙　同日

橙タイ倭名抄ニアヘタチハナ多識篇今案ニカブス俗ニ云タイ〻〻考本艸其實柚ニ似テ其葉兩ニ刻缺アリテ兩段ノ如シ亦一種氣臭キモノアリ橙ハ橘屬ノ大ナルモノ也晩ク熟シテ久シクヨシ其樹高ク枝葉橘ニ類セス亦刺アリ其實ナリハ盃ノ如シ霜ヲ經テ早ク熟ス色黃ニシテ皮厚ク蹙皺シテ沸カ如シ香氣馥郁タリ以テ菹醢ニ和スヘシ將醬蒸韲ニ作ルヘシ以テ蜜煎ニスヘシ以テ糖製シ橙丁トスヘシ以テ蜜製シテ橙膏ヲ作ルヘシ元升曰此註ヲミレハ

橙ハメイノヘウメカヒナシ大カウシトモ云

仏のくり　同日

枸櫞フシュカン　倭名抄ニカフチ多識篇ニカフシ合テ云佛手柑元升曰余嘗カツテ此果ヲミル人手ノ如クナルハ有事〻稀ニシテ瓜ノ如クナルハ多シ其皮シハムトイヘ共其色黄潤ニシテ光アリ其氣清香芳芬タリ生ニテ食スレハ其味甘ク辛ミニテ風興アリ鬱氣ヲヒラキ滯氣ヲメクラス常ニ氣腦ヲ病ル人ハ几案ニ置テ玩賞スヘシ多食スヘカラス反テ氣ヲ破ルタヽミテ玩フヘシ

ゆすらうめ　同日

櫻桃ニウサクラ　元升曰西國民間ニ或ハユスラトモイヘリ

銀杏　同日　梅堯臣詩

鴨脚類緑李ニ　其名因葉高ニ

同　同日　歐陽修詩

絳囊初入貢ス　銀杏貴ニ中州ニ

とち　同日

橡實トチ　倭名抄ニツルハミ多識篇合テ案ニハトリ古ニ云トチ又云ツルハミ考本艸一名橡斗子一名柞子即櫟木子也ニ種アリ實ヲ結サルヲ櫟キト云實ヲ結フヲ栩ト云其實ヲハ橡ト云二者樹小ナルトキハ枝高クリヒハ大ニナレハ枝ヒキク偃フシカム蹇ス其葉ハ櫧葉ニ似テ文理皆斜勾ナリ

四五月ニ花ヲヒラク栗花ノ如シ實ハ
荔枝核ノ如クニテ尖アリ仁ハ老蓮
肉ノ如シ山人儉歳ニハ飯ニナシテ食
シ或ハツキヒタシ粉ヲトリテ食ス元
升曰倭名抄ニ櫟子ヲライチ井ト云
栩ヲトチト云又杼字ヲ用ル本艸ノ
註ヲミレハ櫟モ栩モ一種也實ヲ結
フヲ栩ト云結ハサルヲ椽ト云櫟ト云
ハ總名ナリ倭名抄ニ爾雅註ヲ引
ハ又二種也イヅレナラズシ

けんかの部　一日七

枳椇ケンホ元升曰和名抄ニ枳椇ヲカ
ラメチト云ハ誤レリ

西瓜　同日

西瓜スイクワ和名抄西瓜ナシ多識篇和
名ナシ元升曰此レスイクワナリ和
名ナキ故ニ唐音ヲヨヒテスイクワト
イヘリ考本艸一名寒瓜始ハ回紇
ヨリ出タリ二月ニ種ヲ下シ蔓生
ス花葉ミナ甜瓜ノ如シ其實ハ七
八月ニ熟ス圍ハ尺ニ餘リ長サ二尺ニ
イタルモノアリ元升曰西國ノ西瓜
ハ皆圓ニシテ長キハナシヨク熟シ
タルハ黐色紅ニシテ味甘シ皮肉ア
ツシ青皮ヲケヅリサレハ肉色冬瓜
ノ如シ或ハ羹ニシテ或ハ鱠ニシテ冬瓜
ト異ナルコトナシ

いちご　同日

覆盆子マイチコ元升曰本艸ノ說ヲミレ
ハ覆盆子ハマイチコナリ

○ [illegible]

同ロ

考本艸 [illegible] 蓬蘽ハ蔓ニシテ繁リサカヘ莖ニ倒刺アリ節コトニ葉ヲ生シ葉ノ大キサ掌ノ如クハ葵葉ニ似テ面青ノ背白ク厚クシテ毛アリ六七月ニ小白花ヲ開キ蒂ニ就テ實ヲ結フ三四十顆ムラカリツク初メハ其色青黄ニシテ熟スレハ紫黯也少シ黒毛アリテ又二月ニ苗葉ニホマス元弁曰右ノ説ヲミレハ蓬蘽ハアシクタチナリ

○ くさいちこ

同ロ

考本草蘇其ノ蔓蓬蘽ヨリホソク一枝三葉其葉面青ク背淡白ニシテ少シ毛アリ小白花ヲ開ク胃ニ實熟ス其色紅ニシテ櫻桃ノコトシ元弁曰右ノ説ヲミレハ蘇ハクサイチコナリ

○ 木いちこ

同ロ

懸鉤子元弁曰本艸ノ説ヲミレハ懸鉤子ハ木イチコナリ

○ 蛇いちこ

同ロ

蛇苺元弁曰本艸ノ説ヲミレハ蛇苺ハクチナワイチコナリ

○ みつふき

同ロ

茨實ミツフキ元弁曰茨莖ハ水ノ浅深ニ隨テ長シテ水上ニ浮フ廣クシテ圓ニシハミテ色青シ莖葉トモニ刺アリ和名ミツフキ西國民間ニ又オニハストト云莖ノ軟キヲ蔬茄

ニシテ食ス

ちたい　同ロ

麥ホシイヒ和名抄ニナシ多識篇今案ニホシイヒ元弁曰攝津國道明寺ニ糯米ノ乾飯ヲヒキテ引ノヒト云世俗ニダウミヤウジト云麥ハ乾飯ヲ炒テヒリ糯米ノ乾飯ニアラス

葛根　同ハ

葛根考本艸冠宗奭曰ク冬月ニ生葛ヲトリ搗爛シ水中ニ入テ粉ヲ揉出シ澄シテ塊ヲナシ沸湯ノ中ニ入テ良久シクテ色膠ノコトシ其體ハナハタ蔕ニ蜜ヲ拌マセテ食ス元弁曰葛根ハ春時麥未熟セサルノ間タノ民家ノ糧ナリ二三月ニ葛根ノ土ニ深ク入テ大ナルヲトリ右ニイヘル如クシテ國俗ニ是ヲカツ子モチト云春日荒荒儉ヲ救フ飯料ナリ

鯉　同ハ

鯉魚コヒ倭名抄ニコヒ多識篇オナシ元弁曰俗ニコイトカクニアヤマレリ

ます　同ロ

鱒魚マス倭名抄ニマス多識篇今案ニアメ元弁曰多識篇ノ今案アヤマリナルヘシ

ぎぎ　同ロ

鯔魚ナヨシ元弁曰ナヨシハ其類多シ俗ニボラト云イセ鯉ト云肥前ニテマクチト云又シクチト云アリ

ちぬ　つちぬ引へきか　同ロ

鰣魚倭名抄ニハツ多識篇ニエリ元
弁曰本艸ノ説ヲミレハエリニハ非ス
エリハ形圓クイセゴヒノナリアヒニ
似タリ色ヤヽ白ケレトモ銀ノ如
キニアラス倭名鈔ニ鰣ハ魚名也似
勢ニ肥美江東四月有之トイヘリ
倭名抄ヲ正名トスベシ

同日

鱸魚スヽキ考本艸一名四鰓魚ナリアヒ
鱸ニ似テ色白ク黒點アリ巨口細鱗
ニシテ四鰓アリ長サワヅカニ數寸
元弁曰本朝先輩此數寸ト云ヨ
リ鱸魚ヲアユトイヘルハ穩當ナラ
ス本草註ノ如キハ疑ナクスヽキ
也但長サ數寸ノコトハ筑後柳川ノ
入江ノ海ザカヒニハクラト云魚アリ
其形色數寸ニテ本草ノ説ノ如シ
李時珍ミタル鱸魚ハ此ハクラナルニ
ヤ是モスヽキノ類ナリアユハ白色
黒點ニ非ス太小長短ハ土地異方ノ
カハリニモヨルヘシ三尺ノ鱸魚ヲ鉤
ト云古事モアルヨシ聞傳ヘメリ

杜父魚　同日

杜父魚倭名抄ニ杜父魚ナニ多識篇
ニイカリウヲ訓蒙圖彙俗ニ云ウ
シヌスヒト

同日

石鮒魚元弁曰昔本朝ニハラカノ魚
ヲ獻リケルト也腹赤魚ト書メリ
今人ハラカヲ知人ナシ或ハ鯛ト云

人アリ此石鮅魚ハ腹下赤シ是ヤ
腹赤魚トモ云ヘキカ

あゆ　同ハ

鰷魚アユ　倭名抄ニ鰷魚ナシ多識篇
ニアイ元升曰倭名抄ニ鮎字ヲアユトヨメルハ誤レリ其説ニ云形鱒
ニ似テ鱗ナシト云々然トモアユニハ細
鱗アリ無鱗ニアラス鮎ハナマヅ
ノ一名也古今ノ名称カハレルニヤ
多識篇ニアイイトユド五音相通ス

鯛　同ハ

紅料魚　タイ元升曰本艸ノ説ヨミシハ
紅料魚ハタイナルヘシ唐俗ニタイ
ヲ紅魚ト云小タイヲ赤鯛トカケリ
倭名抄ニハ鯛字ヲ用フ其説ニ云

貌似鄭而紅鰭者云々神代巻ニ
赤目トカケリ倭漢ノ諸説形色
相似タリ紅料魚ハタイナルベシ
白うを　目刺　同ハ

銀魚　考本艸ニ江湖ノ中ニ生ス色白
シテ銀ノ如シ身ニ骨ナシ長サ二
三寸圓ク細ク灯心ノ如ク味極テヨシ
曝シテ尤珍美也元升曰白ウヲニ
此類アリ長崎ニハ臘月正月ニ此
魚アリシロウヲト云又桑名ヨリ
出ルメザシ此魚ノ曝メルナルベシ

鱧魚　八月ウナキハ公ノ条ニ引ベシ　同ハ

鱧魚　キタ倭名抄ニハムタ多識篇同シ
考本艸一ノ名玄鱧即今之烏魚ナ
リ首ニ七星アリ夜ハ北斗ニ朝ス

自然ノ禮アリ故ニ鱧ト云又蛇ト氣ヲ通ス形長ク體圓ク頭尾均シク細鱗玄色ニシテ班點花文アリ蛇ニ類スナリアヒニクムヘシ臭氣ナマグサクアシ、食品ニイヤシ○元升曰此說ヲミレハ鱧ハハムニ非スハムノ形ハ喙トガリ尾ホソシ頭尾ヒトシキニ非ス其色灰白ニシテ班點花文ナシ細鱗モナク無鱗也其形狀モニクカラズ倭名抄多識誤レリ長崎海中ニキメコト云魚アリ其形イロアヒマダラ文アリテ本艸ニ載タル鱧魚ノ說ノ如シ日本人ハ食スルモノナシ大明ノ南人ハ是ヲ珍物トセリ是ヲ以テミレハ鱧魚ハキ

○南人珍物トス北ハ最ム

タゴ也古今テノ名字カハレルニヤ

○ちゝぶ　同ハ

海鰻鱧ハモ考本艸其說詳ナラス但云東海中ニ生ス鰻鱧ニ類シテ大也云々元升曰唐俗ニハムヲ海鰻ト云ハムハ海中ニ生ス此魚ハムナルヘシ

○鯛魚　松魚ノ條ニテモ　同ハ

鯛魚倭名鈔ニカツヲ鰹鰹魚トモカケリ多識篇ニ鯛魚ナシ元升曰本草ノ說ヲミレハ鯛魚ハ河魚也カツヲニ非ズカツヲハ海魚ニテ大ナルハ一二尺其色青黑ク其肉アカシ

○ぶり　同ハ

魚師多識篇ニフリ考本艸魚師ハ魚ノ大ナルモノ也毒アリ人ヲ殺ス

食スヘカラズ元弁曰日本ブリヲ食
スル事昔ヨリ常ノコト也然レドモ
ブリヲ食シテ死スルモノナシ魚師
ヲブリトイヘルハ誤ナルヘシ畢竟ナ
ニトモイマタ知レス

くらけ　同ル

海蛇クラ　元弁曰クラゲヲ海月トカ
ケルハ誤レリ

まて　此説ヲ用ヒ馬刀蟶ト二題ニ別ヘシ　同ル

馬刀マテ　元弁曰馬刀ハマテナリ其カタ
チホソク長クシノヲキリ丸コトク
糸ヲヨリタル管ノ如シカラノ両頭ハ
ヒラケトホリテ合セス其肉モクタ
ノゴトシ又曰蟶アケマキ　元弁曰和
名抄ニ馬刀ト蟶ト同條ニイダシテマテ

二題ニ分ルトキハ此処ヨリ又曰ヲノヾキ分ベシ

トクシセリ多識篇ハ本艸ニシタカツテ
別條ニイメストイヘトモ亦トモニマテ
トシンセリ馬刀ト蟶トハ形狀アヒ似タリ
トイヘトモ別種ナリ馬刀ハ其肉カラ
ヨリヤヽミジカシ蟶ハ馬刀ヨリ大キニシテ
人ノ手ノ大指ノオホキサナリナカサ二
三寸ニシテマテヨリミジカク殼ノ両頭
ヒラケテ其肉ハカラノソトニ出タリカ
ラハミシカク肉長ク肉ノカシラハヤヽ
マルク尾ハニツ出テヽ両足ノ如シ肉ノ
中ホドハ帶ヲシメタルガゴトシ梵裏
ノ御簾ニ付タルアゲマキノ緒ノムス
ビタレタルカタチノゴトシ故ニ肥前筑後
ノ俗ハコノ貝ヲアゲマキトイヘリ

すゝか　同ル

寄居蟲カミ 和名抄ニ寄居子ト云フ和名カミナ多識篇ニカウナ元升曰カウナトハ後世ノ俗語ナリカミナト書テカウナト云フヘシカミナカウナ二物ニアラス又一物兩名ニアラス

鷓鴣 同十

鷓鴣元升曰是ハシキノ類ナルヘシ本艸ニ形母雞ノ如クイヘバウバシギニテモアラシカ鷓鴣ヲシルヒトナシ

升雞 同日

竹雞 倭名抄ニ竹雞ナシ多識篇ニタケノトリ訓蒙圖彙ニヤマシキ或云ウバシキ考本艸此鳥多ハ竹林ニヲレリ其形鷓鴣ニ比スレハヤヽホソシ褐色ニシテ斑オホリ赤文アリ好テ啼鳥也其儔ヲミレハ必ズタヽカフ又好テ蟻ヲ食ス元升曰此說ノ如キ鳥アラバ竹雞ナルヘシヤマシギウバシキイヅレナルラン

杉鳩 同日

鶉 賀鳥 同日

元升曰鶉ト賀鳥ト和名ヲトモニウヅラト云四時常ニアルハ鶉ト云ウヅラ夏アリテ冬ナキハ賀鳥ト云ウヅラ是ヲ以テワカチシルヘシ

鴻 同日

元升曰雁ノ大ナルヲ鴻トス今俗ニ云ヒシクヒハ鴻ナルヘシ其形狀雁ト異ナルコトナクシテ雁ヨリ甚タ大ナリ或ハ野鵞ト云ナルヘシ

抄名　同日

鴛鴦倭名抄ニヲシ多識篇ニヲシトリ
元升曰本艸ノ説ヲミレハ今俗ニ云ヲ
シドリハ鴛鴦ニアラス今云ヲシドリハ
頭ヨリ尾ニ至ルホトノ白長毛ナシ又
オモヒ羽ト云モノアリ鸂鶒スナハチ
今ヲシドリ也倭名抄ニ鴛鴦ト鸂鶒
ト同條ニ載タリ是ニヨリテ鴛鴦鸂
鶒ワカチナク俱ニヲシドリト云後世
オモヒ羽アルヲヲシトリト云テ真ノ鴛
鴦ヲシラス多識篇ニ鴛鴦ヲヲシド
リト云鸂鶒ヲオホヲシトリト云ヨロ
シク是ノ説ニシタガフハシ

抄名　同日

鸂鶒　元升曰倭名抄ニヲシ多識篇

ニオホヲシトリ考本艸ニ形小クシテ鴨ノ如
毛ニ五采アリ首ニ纓アリ尾ニ毛アリ
テ船柁髭鼠ノ如シ元升曰今俗ニ云ヲシ
ドリハ是也尾ノ兩邊ニ毛アリ船柁髭
鼠ノ如シト云ハ俗ニ云オモヒ羽也鴛鴦
ニハ此羽ナクシテ頭ニ白長毛アリテ長ク
垂テ尾ニ至ル

川　同日

魚狗ッヒ　元升曰桜倭名抄云鵠ハ和名
ソヒ爾雅ヲ引テ云鵠小鳥也色青翠
而食魚江東呼爲水狗又桜細註云
文德天皇録用魚虎鳥三字ヲ此説ヲ
ミレハ魚狗ハソヒ也水涯ニ宛ニテスミ
水上ニ魚ヲトル和名ソヒ今俗云カハセミ
也本ハソヒト云ナルヲソトセト齒音相

通シヒトミト開合相叶ヒメルニヨリ遂
ニ俗舌轉訛シテ今ハソヒトヽ云モノナシ
皆アヤマリテセミト云サテセミト云ハ
モトムシノ名也彼是イヒワカチカ
メキニヨリテ魚狗ヲハカハセミト仆ル

○翡翠

翡翠セウビ 元升曰此翡翠ハ倭名抄
ニ和名ナシ俗ニセウビト云本名メル
ベシカハセミト云ベカラス魚狗ト形色
相似メル故ニ翡翠ヲカハセミト云ハ俗
間ノアヤマリ也

○鴟鳩

鴟鳩トシヨリ 元升曰

○伯勞

伯勞 元升曰

伯勞倭名抄ニモズ多識篇オナシ

考本艸一名鶞一名鴟李時珍曰伯
勞ハスナハチ鶞也夏鳴テ冬止ム月
令候時之鳥也元升曰此說ヲミレハ
伯勞ハ夏鳴冬止日本ノモズハ冬
鳴夏止シカレハ伯勞ハモズニアラ
サルカナヲ能識人コレヲメヽスベシ

○雲雀 元升曰

鶞ウヒス 元升曰本艸註ニ倉庚ヲウ
ヒスノ一名トス 按倭名抄ノ倉庚ノ
和名ヒバリ月令云仲春倉庚鳴
今アコレヲ詳ニスルニ鶞ハ立春ニシテ
鳴是ウヒス也仲春ヨリ早キコト
三十日倉庚ノ鳴ハ三十日ヨリレメリ
依是イヘハ倉庚ハウヒスニ非ズヒ
ハリナルコト分明也月令說正カルヘシ

倭名抄アヤマリナシ

丗九　同

杜鵑ホトトギス　元弁曰ホトトギスハ倭名抄ニ鷓鴣二字ヲ用フ其説ニ今ノ郭公也ト云テ他ノ異名ナシ鷓鴣二字ハ本草異名ニモナシ字書ニモ分明ナラス杜鵑郭公ハホトトギスニ用フルコト古今其例オホキニヤ

猕猴　同日

水獺カハヲソ倭名抄ニヲソ水字ナシ多識篇カハウソ元弁曰ウソト云ハ俗言ノ誤リ也

あらうぐひす　同十二

鶯　元弁曰番椒ハ西國俗ニ云フナンバンゴセウナルベシ京關東ニテタウガラシト云フ

ぎをんけづりけ　学環きをんまち紀綱目祇園あぶりかゆ乃祈事元弁寅の刻行之

苟のもの　同

苟のものこかつらけ

二宮大饗　同

二宮大饗二乃宮とハ東宮中宮の侍事しまつる宮なり拜礼ありて饗ゑ侍く事なり

行幸　同

朝覲行幸二日天子の母儀ゑ上皇并ゑ母后の宮ゑ行幸ある事なり

おを手つむ　同

蘿蔔摘

○後陸奥　同

常陸帯乃神事十日鹿島の明神の祭の日女のあはう人ゆまるゆるゝ紀其花とこの文字を布の帯は出あり初て神前に置て中にうゝてうゝる帯をうて其帯のぬの花とこと考ゝくなるるあり

○帳とぎ　同

帳洗十日十一日

○そうこん草　同

蘇民将来こんゆ八幡の厄神へまうてゝそうこん将来のれを求めて帰ることゝ

○みくゝ草つる　同

福寿草元日より咲ていり

○さうひめ　同

佐保姫三月にわつる

○夷の宮　同

夷の宮赤宮也

○夷まつり　同

夷麻気氏夷ゝ帯てとゝ通

○象宗寺　同二月三郎

象宗寺最勝会十九日より五ヶ日

○踏歌の後宴　同日

踏歌乃後宴これハ二三日の百七歌

○中和の会　同日

中和節二月朔日ゝ

こなすつむ　同日

水葱搦花ハ夏なり

まくらふし　同日

むくのかぶ

あさつき　同日

蕗

石清水臨時祭　同三月

石清水臨時祭中乃午の日事なり

これなり

岩もの　同日

順乃家へ真大家よいる事なり

みた摺

庭摺　庭の摺の事ハあらず

さくらふ衣　同日

ゆくゝ衣表白裏赤菊と極花の清流

山吹衣　同日

山吹衣表黄裏ちゝ黄なり

うゝ山吹　同日

表黄うゝ紅

ちゝ衣　同日

ゆゝ衣表ちゝうゝ黄

白ちゝ　同月

白重ね衣の時の衣なり

ちゝ子　同日

大神祭三月卯の日

水屋祭　同日

水屋能三日四日五日

山ゆの使　同日

山ゆ日使買三日或ハ三月

多賀社神祭　同日

年ぶ天神祭ふ四月年日近江
神衣祭　同日
伊勢神衣祭四月十四日麻績乃
連さいふ人麻をうえて織り衣
を織て神明よしてまつる
より四月　同日
吉田祭ふ四月中子日より四乃巳
日の事なり
ゆどんご　同日
千國ゑ四月十六日三井寺北鬼子
母神一年ゑ事なり
花供　同日
花供四月廿一日高雄大師の御衣
を取ゑる
いちまつ　同日

一八

あんご　同日
安居ゑ行をいふ
代搭司供ゑ仏　同五月
内膳司供ゑ仏山城の内園より
たてまつる
五日節会　同日
五日の三献會　天皇武徳殿ゑ
出御ありて宴会を行はれ殿
上ゑ酒をあたふし人々皆あやめの
ゑつをかく典薬所ああめの
ゑつをたてまつる事なとあり
きそひすり　同日
競馬こんゑそをつむ事なり
ゑそをたてうん　同日

百姓をたつかへ民を殺す事にいたるの事を合て儒頂[illegible]出る事なりけいと　同日

雜説五月五日川より出て舟の通速なるとをあらそひたつむるすもうなるよ

左近のゑもつひ　同日

左近のゑもつひ左近のさてゝまてうひいハ六日こ見をひをりの日こ云り三日ハ左近のあらそつひ四日ハ右近の菖蒲五日ハ左近のまつひ六日ハ右近のまてつひし

仲秋の名月　同日

神の為年年の時の雨仏を為まるをこ云り

櫓のおひもの　同日

櫓のおび五月五日櫓の薬をこりておびものこりて悪気を去事なり

帰り雨　同日

虎ノ涙雨五月廿八日

うるさきのも　同日

わるさをみの花ハいもの名

さうも　同日

辻ノ花惟盛のもの名

形代　同六月

形代ハ人形をはらうて身の災難を祓て川〳〵流出るをこれを云

川社　同日

川社ゑ板橋川をよ柵をうまく
て祈をまんする事なり

○落火なし　同日

落火なし六月廿日ト部氏の人火を
折て高城の四の角にて祭るなり
あり火災を防ぎんなる也

○道饗祭　同日

道饗祭六月廿日四角四界の祭
これ卜部氏の人都四方の境よ
て鬼魅の四方より来るを京地
よ入けんなる為上ゆ供物を置
てまつるとなり

○蕃神の供　同日

雷鳴の陳　蕃の部ノ三友言くなれ
ハ大将ヨリ近衛の次ぎまて弓箭

箭を帯して内殿の孫廂よ
候して帝を守護しまるゝ

○大祓　同日

大祓　よぶなり

○三伏　同日

三伏ゑ夏の庚の日を
初伏といひ第四の庚を中伏とい
立秋の後最初の庚を末伏
といふ也を三伏といふなり

○風蓋　同日

風蓋六月吹涼風なり

○さゝ出井　同日

新井六月よ井をけゝ暑気の
なるよ用るなり也

○かも　同日

みたま今ところてんとゝふものゝ
こゝる　同ロ
海松　こうきこゝる　こゝるこゝ　うミ松
対干　同ロ
対干（カン）一説ゝゝあるゝ
あゝゝゝ　同ロ
赤ゝ　赤ゝ
ゝりひゝり　同ロ
ゝり毛毛毛ゝゝゝゝをいゝ
毒虫　同ロ
毒虫毒をこゝゝとよむ、蛾ゝり
おとり虫といふも同ゝ
せゝゝゝとゝゝ後り
金ゝゝゝ　同ロ
金亀子（コガネムシ）

まゝゝゝ　同ロ
蠟燭（ロウソク）　酒のけゝ燈ゝとゝゝ出ゝ
形原　同七月
初源（ハジメテスジ）又新源（ナラフスジ）
板付　同ロ
板付菓を以て菓の名なるゝ
ゝゝゝ
芋の菓の雫　同ロ
芋の菓の雫ゝゝ小武國の風俗なゝ七
夕の雫をゝ向ゝゝ芋の菓の雫
を硯ゝ滴て梶ゝ書ゝり
以疱瘡　同ロ
本願寺門跡の名號ゝ七月七日ゝ
花をゝて色ゝの作り拍立ゝ
板屋　同ロ

樒買先い六月よりうて買もて
きてゐまつる事なりて買なり
墓なり　同日
墓をつくり百日の先祖の墓に詣う
ぢるこれもうしぐんのんをこゝろ
生身む　同日
生身玉世よ父母もてる人ハ生身
むとていをゝ作る
三井寺女治　同日
三井寺女治七月十日よりつゝ
女人まうでぞゐ五日ゆる作り
つとへ　同日
盆花法ゝ七月十六日伊勢山田よ
りさゝの出立て人の家よ法ゝ
見ゝ物をみるるもし

解夏ゝ　同日
解夏草　浙右北俗毎年の日
綵をもて茅をつゝて旦越よ送
るをいゝし
物とゝ　同日
物の擬の花物とこ花のありさまを
ゝ茶一しよ似て色きゝ花白
一
仙翁　同日
仙翁花又和樹ゝともいゝり
菜師ゝ　同日
菜師草　本草ゝ麻の菜ゝ
翁草　同日
翁草ゝ蔦ゝあゝ翁草花白し
観音草ゝにゝる也あり

まちの宮 同日

蓮花寺花寺ニ井ハ有なり

うの丑刻 同日

うのむ刻但うのむニ井ハ雑

ニ秋風ふけハ文意しるべしと

藤田姫 同日

藤よりも典の音に聞るゆゑといた

ねを秋よりあらん

姫路 同日

姫路山姫ハ秋さりに聞ハ人姫の

まねをしてよを含て姫の節

のあるに聞なるゆゑ姫とるゆ

ゑ事なるためなり

あの伊八幡宮 同日八月

伊勢の津八幡宮八月十五日俳

死活秋の宮 同日

死活秋の宮 ゆのもの車に禍迷

の社とて昔ハ毎年八月ニて

にてまりまりこれいいす形

部の刑獄刑法をさだめ五刑

を行ふ其死罪の者の迷答ま

まりまりと云

秋社 同日

秋社 秋分の後ま迷き成日ニ

五穀の神を祭ル

池田姫 同日

龍田姫 秋の色を陳出て迷化

の神なり

秋の宮 同日

秋の宮中宮の清事なり

うつぼ　同日

苅安（カリヤス）

野分　同日

野分八月ゟ吹大風

たゝゝの市　同月

住吉北市九月十三日たゝゝ北市ともいへり

八幡花の祝　同日

八幡花の祝九月廿日作花ゟ

朔旦冬至　同十月

朔旦冬至十一月朔日冬至ゟあるゝを云

宮線を除　同日

宮線を除もこゝゟ宮中に紅の糸すちをもて日うけを

そうるに冬至の後より日ことに

もさ一線を除ると云

襪を焚　同日

襪をたてまつるもろこしより冬

至北日人のよめるゝよのなかの

ちゝこつをたゝと姑のまゐり

りの使　同日

猪の使先ハ上巳の祝ゝ猪つゝん

ゝに交雑に雑物をとゝ石れし

ゝ使のみを猪の使とゝ云なり

結魂祭　同日

結魂祭十一月中子日此祭ハ人

の魂魄の離散をとゝまりをきて

身中にとゝまる功能なり

新嘗祭　同日

新嘗祭十一月中卯日これ今年のこの種を神にうえまつらせのふ義に

豊明節会　同日

豊明節會十一月中辰日是いことの始を神にまつらせのふてりふ君もきこしめし所下にもたまふ義に

東三条法神祭　同日

東三條法神樂十二月下卯日

法華会　同日

法華十二月廿七日事日に

杜父魚　同日

杜父魚この頃の多く出る魚に

乙子祝　同日

乙子祝日人の乙子とするものの子孫に事に

手徳神　絲切歯

簑繻輪年徳神其年ノ元方ヲ主トル神に俗家元方ニ新タニ棚ヲ構ヘ備食夜ハ燈明シ元日ニ祭之卯日ニ至テ其棚ヲ止ム下略愚按年徳神を元日に祭て卯の日に至て止る京師及幾内いまこの例を不守主家ハ節分より祭之又正月ハ節分あれハ大晦日の夜より祭る而所十四日帰りとこもに納む卯北日に止るる首下る

俵　同

俵をおくまき及諸出ハ海鼠に

有眞祖桂本舊德義の從海嵐
まあらしゴマメし通俗志ょ俵るハ
屋系農夫と出しり三名一致うて
ゴマメハ常の稱号し肯ハ上一人
より下方民まるまて祝儀
先小屋系ハ武都の祝儀田つくり
農家俵るハ商家の祝なりまて
商家ハ年の内より師俵なと
都度ょ俵数を積而を以れ
ハ見ょ考しとの師説なり
愛宕寺天狗宴 絲切 日簑纏輪
愛宕寺天狗宴二日洛東六波羅
ノヲメキノ寺一名珠皇寺ト云フ
清水坂ノ弦刺共此寺ニ會合ニ大
鼓ヲ打酒宴ス是當年祇園會ノ

事ヲ定ムルし俗天狗宴ト云清水
坂ノ弦刺ハ犬神メリト云テ祇園ノ社ノ
使令神輿舁シツルメリト云訓ハ弦刺
召ノ訛言シトリ愚按珠皇寺トハ
此味なり珠皇寺ハ往古ゆ宕のち
といくとも廢して今六道と終
に殘れり六波羅地町念佛寺と云
ふ延暦十三年沙弥創建ス二条
の西なりを宕ようして宕
山と号ス釈千觀珠皇寺裏微
ようりてなる觀音を念佛ちま
仰む今ハ念佛ちを宕の觀音
宕のちもいふ此ちまて天狗宴
ありツルメリハ念佛寺門前町ょ展
服部越前大橋長門並川甲ちとハ

弦刺矢師皆師なり 神輿舁は
あるいは祇園会なり 四家の雜式に
後き行列は神輿舁は播州今
宮の住民なりなる順例なり

恵ぐつむ　同日

エグツム 女萎（エゴ エゴトモ） 白歛（カヽ ミクサ） 歛ニ似テノ蔓生
ノ小草也 生水邊 紫赤色ノ花アリ
モシホ州ニハ芹ノ異名ナリトモ云ヘリ云々
愚按ずるに この外七日の若菜は摘と
異竹にも見へたり 七種十二種なるは
芹ハふ演して名くの名目なり
芹の異名なるは猶

福いも　同日

フクワカシトハ則若菜ヲ囃スヲ云福
ワカシノ祝語ナルヘシ云々 愚按福

芹

わかしハ若菜なるは若いふといいん
なるすとハ七草祝なるなるなるを
宮の宵より七日まで五穀にかなる
なるを福わかし 宮環は若菜の
像トは出さりしとれハ京師にて
七日の朝若菜の掩像（ヨウカキ）を祝ひて
食せるをいふなり 通俗志は福
の一四日とあるとれハ元日より二
日年徳神及び諸神を倚（ヨル）する
雜煮あるて版の和尾芋を集め
煮て四日の朝像を祝ひ食
ハ大坂堺にていこれを福ろし
と云 京師にていハ四日を棚さげし
といふて七日を福ろしといふ
京大坂の宵はさ遠ふるあれハ

遠國ハ遠ふ〳〵し是ホを心得て
向作すべしとも亜師を以て本
とせバ福多しハ七月
おそもつむ　同日
薺蒿摘ヨメカハキ也幾月ノ女言何ノ
上ニモ御ノ字ヲ冠ラシム依テソレニ混シ
テ江東ニテハ只ハゲツムト云リ云々愚按注
甚混せり是菁のすゝし菁（ナツナ）蒿（ヨモギ）と訓ク
本文ニ云るよめ菜紀ハ別物なり
をそ〻き御蒿の異名ゝ七日ハ摘物の
名ゝと師説あり文字と云説と云
薺なるべし形ゝ
菜摘川神事　同日
菜摘川ノ神事七日和名抄吉野ノ上云々
愚按此一條芋環の一通りて矣ゝ

是吉野郡ノ名所の名なれ解
何ゝ京師より勅使ゝ月毎ゝ
解あり多神愛髪愛命天孫降
臨侍從三十二神の名ゝ
夷祭　同日
夷祭十日此社攝州安倍野ノ北ニ在
祭神蛭兒太神　天照太神　素盞烏
尊三座也毎正月十日祭之貴賤成
群ゝ俗十日夷ト云俳諧十日夷トミテ
正月ノ季勿論也云々愚按通俗志言
居紀九日雪十日戎今宮とあり皆戎の
神祭ゝ十日ハ法花も戎祭なれ
中にも摂今宮の十日戎ハ九日と為日
近國の群集おびゝし世俗ゝ此神
ハ福ゝとして参詣の諸人夥の

後の板をたゝく音夏夜西海の素
く街の黄昏市をゝ袋及ひ
たゝく拍の細工下向の笹を洗
ひ乾かし冠のおゝしきを求ておゝ
ふりをして往来の笑ひを催し
その道節おつゝき竹の林をなし
真あるゝ人ゝ天神之社三座
といめ伊五座ゝ中央天照皇太神
素盞烏尊 蛭兒尊 月讀尊 稚日
女尊 日上五座

摂津国 同

祇園牛頭天王霊会六月七日十四日南日
摂州今宮の〳〵民数百人毎例として
神輿舁の役を上座の故あるゝ
とそ世俗云伝ふ今宮の人振ひ

祭い神輿動ぬ〳〵とゝ

平岡御祭 同同

平岡ノ御粥十五日 河内國平岡ノ神前
ニテ赤豆粥ヲ煮テ其年ノ農事ノ
吉凶ヲ占フコト也平岡神社 天児屋根
命 鸕鷀羽葺不合尊 大國主尊 櫛
幡千々姫命 以上四座也云々 愚按ズ神
達〳〵 河州河内郡平岡の社い
當國の一宮ゝ名神四座 春日同社
天児屋根命 姫大神 武甕槌命 斎主
命四座ゝ當社名礼多き中ゝ正
月十五日ト田の祭り 二月 九月 重陽
の清祭 十一月上申日 ゝ大祭
礼ありしゝ世ゝ礼妨ゝ廢して 月
ト田の祭九月菓の清祭 いそゝ牧

行あり 修ハ終ニ神ニ奉献のミし
先正月十五日神粥の神供ト田祭のる
也 神饌殿ニ大釜をまく十四日夜り
稲米小豆を煮て夜明て神供とし
其釜の上ニ五十四本の竹を五寸ヨ
リ伐て簀とし ひとりニ抱ひて釜の
上ニ置 十五日早朝粥を神ニ供
奉り五穀成就の祈念の板文終て
夜五穀及ひ綿ホのもの五十四宮
ニ分し一袖ニ合せ一ツ宮を
とりて天狗ニ粥の宮中ニ入を
かゞひ入る多少あるひ贄の
加減をもつて去凶をトひ神宮高
夢ニ上中下を定てよゝ上るるすし
近國の農人遠国の殿条未明より

お詣て手トをゆ下て各書付持て
一ツのたゝつ杯の多少の農作神ト
に伺せて稔を祈る

高間清板　同

洛東高間山神樂岡宮殿ハ大日本
神祇の首領唯一の政所ニ十九日夜
清板と中ハ年越の夜庭上ニ厄塚
を築く蔵を中央ニ立て柳を以て
言く盛りしるものゝ神祇宮牧行
志の上四方の厄神を此塚ニ勧納
め須連を以て封ス 正月十九日此夜
暮方より三元の板を中央ニ大麻
左右十六本の幣をこゝる事嚴重
天津板國津板蒼生板三ツの板
神宮ニ祈を牧り清て彼厄神塚

より一符を出し一座正の火中に焼
厄塚を解脱ふ沈香の刻し是を
法師と申なり

ひとこと　同

手の一流はひこさくと斗春と云
冬木とも云ふ斗りなるとも云ふ
四季に渡りて年中のよりて是
を称するなり　依て通俗志ふ
樵夫と斗解し木こるなるなり
よりて蘖と書く　是蘖を山四の
ひつちひこさくて穂を出るなるなり
かくなる時は新さるし
なるなる　同　同

百千鳥又呼子鳥ハ活法ノ書ニ出シテ
只春ノモノト心得俳諧ニセヨト云説ハ
他門ノ沙汰ナリ蕉門ニハ傳受ナキ者
句ニスル事不赦之　百千鳥呼子鳥稲
負鳥ハ古今集ノ秘決也傳受モセ
サルヨト句ニ作りテ如何ソ心通スヘキ
何ノ詮ナシ無用ノヨシ古翁句合ノ
判ニ禁メラレタリ蕉門ノ俳士可得
其意云々愚物他門蕉門ト云ふ
説得ス二ツ有　皆貞徳の流れし
貞徳ハ玄旨法師の十哲第一ニて二
條家の奥伝を伝へ古今集相伝
の宗匠し只歌のみにて句作す
きて　免し　言れ　て　なり　三
鳥の伝ハ古今和歌集一部の内三首
を取りその伝授し侯古今集の三
鳥を伝へ受ると一伝の通ひ句

作り世に流行の書用なる歌代の撰集なれども此三ッを称する事多し
皆古今の意なれども和歌まさに歌況や流行なれども既蕉門なり
俳諧古今抄に曰三名のうち近代連
歌は制度なれども俳諧は伝受
せざるも正統を志ざすものの
流儀方は門名なりと云るてすて
又は俳名なりあらんと云て
吉野の俳配り　同
吉野山流て其家別に先寺家と
中は天台宗にて花供方と号み方
法方とも云ふ言宗にて懺法方と号
皆蔵王堂にて双方立合て花供
懺法を行ふ式行ひ果て俳を

献ずるなり又同じ所にある左家は二月
月の内より配る寺々堂といふは件
るうとそ

二月堂行　同

世に牛王と称して寺社より出ッ
二月堂及び熊野は情あるは多く
画き牛王宝印とは此出示称門は
彫れども印なるうに石摺なるに
律僧あり牛王は語られしは牛王
と出るは誤りを押て昔より書来
れるものゝ牛王といふ本探なり
元亨　璽ヨシルシ　璽を押して出
筆法別にて上を略して
牛王と二字は出来れりとそ

二月堂の所　同

皆彼の一滴を汲き若狭の井より出て
若狭くと呼ぶを為して息
霊の滴上る事を以て祝水と
彼牛王を印ける若狭国遠敷
大明神より観音へ献せしめ給へ
諸記に載せり遠敷の社八方
以て出見る事玉垣を結ぶ拙き
山の麓より移の閼の閼と云あり皆
閼水暫く湧るとへ奇なる
天王寺聖霊会　同

荒陵山四天王寺八仏法最初日東の大
伽藍化導く世を知るなれ八墨代年
中行事の法会七十箇度今世大会
二三会度して後八毎年一度行
あり二月廿二日石の鳥居まて終日

伶人楽を奏たるの法風肇上
時堂八液印法のまの有公
文所秋之坊執行せ法彼家相傳
の秘するよし鳥居のすぐ
鳥居の四隅より曼殊沙華立ち
の間八池水を湛ふ伶人の袖い
ろ舞ふ天王寺の鳥居の
る舞ふ斜陽西山に
傾く法風肇還御路中公文所
信従伶人還城楽を奏して供奉
只事　同

二月十日天王寺の公人八樹堂の
前にて日和乞を行ひ住
吉の庫一郎君子を取ふ
これ八廿二日上宮太子御霊会

生条ノ芹環ニ二月ト六月トノトコロクロセハ本書ニハ活法書ニ二月ト六月トアリ芹環トサニハコレナシ自説ノタニニ置

の曼珠沙華ハ此貝殼付るなり世俗云伝ふ此ハ浪花の附子屋より敷ぶ依て貝殼に吹とぶ

蚯

同同

蚯蚓芹環ニ二月ト六月ニ出セリ蚯蚓トツヾキタルモノ夏季勿論也二月ニ出セルハ誤り也蚯ノ子ハ春季モ可也云々愚按法書皆二月ハ生ル夏季ハ出ル通俗志ハ二月地出の蚯蚓を出るの積き蟄蚯蚓と出る一概ハをゝ為きをおんより我れを出るものゝ六月ハ蚯さうんハ花ふ沢なるより誤て出ると云ふ又蚯の子と何ゝも夏季モ可ゝ云ふ是誤りなり蚯ハるのなきものゝ

是胎卵化の四生を約ゝまる故ゝ葉世傑草木子ニ曰胎生ハ眼胞上より出る卵生ハまゝ下より出る但卵ハ陸生のものハ眼ゝく開閉温生ハ固ふゝなくして閉る故化生ハ眼ゝ穴なくこゝるくゝ上りて黒點あり則蝶蚯蚓及蛙蛉蟬ハ等ゝ夏ゝ生をかゝる時芽を乗ゝ故ゝ蚯のるとハ有ます

ゝゝなぎ

同同

水葱凍葱救荒本艸ニ生氷邊淺中ニ類葱細長ニ其莫頭蔓莫ヲムスヒウルミ白キ小花ヲ開クト云リ花ハ夏ト云モノ是也愚按ミヅ子キとかゝ付るハいりんゝ救荒本草の凍葱

を出して水葱と混ずるなり松屋
し松岡先生の説も凍葱と訓ずと
ありおもうまきなこなきとあり是ハ
これ花ハ晩夏より秋にかけて咲水葱
なぎのてすら古人水葱なぎと訓し
てる白をいまゝ水葱こなぎつむ
とハ京連歌集会ます出すり
ふゆのまと混合せし水葱とハ
泥蓮なる説きこなきハ
此菓の樹をいふ

京都名所式　同

愚物考ハ鷲勝手社の神樂二
基藏王堂に法華道場に神樂
待会せなどゝ云るあり菊亞堂
万物方寸象方立會て法花千

部略抄ありと云

菓桜　同

菓桜他門なるとも推一説也
通俗志三月の部に菓の花桜
通桜の分八重桜の分菓桜と出る
桜ハ五なるふるも花より先
菓出る花咲ぬ間に菓桜とふ
て賞翫すいわれなり　松岡成章
成章先生曰凡菓桜と云ハ八重
の中にすて名の桜なと云ハ情合
さくふハきまで先なるとなるとと云ん
まて此名あり虎の尾姫桜ハ出る
菓のせんさくより外なる名なれハ
此菓さくふしと云て伝て
通俗志ハ八重桜の分菓桜とつけ

う葉はうの樹をいふなり
葉と知る
こいめ花 同花
小米ノ花小樹叢生葉尖ノ狹クニ節
アリ三月小白花ヲ開クユヾナリ咲
テ白キ事如雪蒸糯ノゴトシ愚按
近江ないかゝすわ京師幾内ハ
篠蕪の花又雪柳ともいふ立春
ちゝ花の内ニ漢名笑靨花
合法 同 同
令法 山茶科 又ハ久ツモリトモ云木モ葉
モ淀川ツヽミニ似テ花ハ灰白也飢年
ニ採葉蒸テ食ス佳味也トソ云々愚按
飢ノ年のみあゝ法常ハ食ヒなり
和哥祭 同

和哥祭十七日ニ通俗志ニ出紀州和哥
東照神君此所ニ祭禮なり神輿渡御
甚嚴重なる市式事ニ遠近の郡
条ひとし中ハ雜賀踊と号
して佩刀をさゝらをする踊
故あるなりとそ
地とうせ 同 同
踊り花高サ尺ハかり葉ハ小葵ニ似
タリ葉ノ元ニ小白花ヲヒラク其カメ
千兒童ノ笠ヲ着テ踊ルニ似タリ
故ニ名トス云々愚按ずるに花ハ和名
し是積斷のすゝ 大和本州ハ積
斷俗ハ鬼薊ヲ云ハ鬼ハ與大小薊
不同葉如芹花似益母ト云 官刻
普救方曰積斷踊り子茅高尺

斗葉ハ草に似て小さく莖四角
根茎劍のごとく芒とり白花をひ
らく人の笠なて踊るごとく本艸會
志曰續斷ヨトリ艸又コモサウ艸ト云
為盤木葉葉　同　同

常盤木ノ落葉　松樅等ノ落葉也
或ハ雜ト云説モアレドモ翁清滝ヤ
波ニ散コム青松葉是夏句也證句ト
スベシ云々愚按ずるに雜とは蕉門なる
とせるものハ蓮二房ク俳諧玄今抄
新例の内ず松葉とあるこなるとみて
物もそれなる習て此句を證とせる
蕉門なるハ可なる　先松葉の
後葉ハ惟一流通俗志の旨なる蓮ハ

ぶ雜とすべし

うんこるる　同

鳲鳩のかこち杜鵑ず同　羽の色
獨の猩猴少しも変ぜず只夢と色
足の色ハ変りめみかんこるハ他ず
と同　ぶとまたハ茶後ず色ハ二ツ
宛ある木まとまるず四ツを以て又
うんこるず間呼名とおク先和製の
み字ぶ雅ず第れハ用ひ　句も
寂寞をまとる

冬ず　同

杜宇我知るハ杜鵑ぶ十王經の別ホ
都頓宝壽と云鸚鵡とハ別ものなり
和のホトトギス親ハ前後四の鳥より發って
四ずの内七の名あるまよせて知るべ

死出の山よりこゆる十王経の異名と混せられてめいとの名なり忌るゝ人の親の不幸に忌ハあれども和音と称し世ゝ世ゝ忌れて四季の亲指の一とあるハ又クレの運尽さる而し支那よりを悪ハ和漢名ハひとしうして平る遠ゝるゆゝ混ぶゝいまハきるよあん友う集よ石上ゆる兜都のわとき声ゝこそむゝ雲性後後拾遺集大原の小塩の山の世名我よ神代のゝ語ゝ多ん左大臣赤本集幸崎のまりとせまたる親神よりまして和音唱名り定家恋歌名

同 同

蚊

蚊喰鳥 此鳥一切ノ禽史ニミエズ江東ニ在リ鳩ノ少ト小ナルモノニシテ鼠色ナリ黄昏人家ノ軒マハリニ飛行シテ或ハ塀隘ニ居テ蚊ヲ喰俗蚊鳥ト名ク予両度見之トモホノ暗キ所ニテ其背等ノ形容シカト不見届伝テ委ク難記云々愚按蚊喰名ヨリ一切の禽史ニ有るあんや江東ハ云々 蚊肉ヨリ蝙蝠の俗名ゝ兒童蚊喰名るとゝ

かよびゝ

同 同

蟹鰕 蟹ノヒミコ漬ナルヘシトソ鰕ハ鰐ノ属ニテ小ナルモノ也鰕不解但蟹肉醤ナラシカト云々愚按鰐の小なるハヒシコとゝ

ゝり漬といふ字なくそれ他のまゝ鰕

蟹

とハ云ふ〻しの論尤も極せり訛
俗ハ俗談多き家世話まし多し秋
小鰯多き時ハ漬しるを鰯漬と云
るゝ是いつゝり鰯漬の惡名となり
鰯と斗まても鰯漬のみと覺へ又
塩漬の名となりてり攝津志曰
西宮産物ハ至り海鹽醯の名字見へ
是塩名とあれるを初る〻〻或ハ大森
といへハ仙と覺へ物なり但民の方言
とゝもるゝ不及未書をとゝるゝ甜仙
ゝマクハとかゝ分しゝる多くゝ見ゆ是
ゝて終す〻〻

大原さし　同同

大原志（オハラザシ）廿八日　丹波ノ國大原ノ社ヘ參ル
ヲ昔ヨリ所ニテモヲハラサシト云習ハ

セリ當月農事ニサシツドウ故ニ近來
三月ニ神事トリ行スヲ春サシト云リ大原
ノ神社元ト伊弉冊尊中古伊弉諾尊
天照太神ヲ加ニテ今爲ニ三社ト云々愚按
農事ニさしつゝ五月を三月ハ執行
ふゝと覺てなるゝ〻〻後世より來
秋の祭奠ハ遠近報系ハ今ハも
又系諸ゝ三月廿三日ハ來ぶ〻　十月
ハ大原さし　但平日の系諸大原さし
と云有　廿三日を秋ぶ〻しとゝ祭
神注の通りゝ城州丹州江州及ひ諸
國ゝも蛮例（エカヒ）なる者ゝ〻ハ崇彩ハ也
蛮例をもりなふ沙神なれいゝ又蛮
例家ハ火を改（ムカ）段（ムカ）往ゝ年の孫人ゝ決
を侍ゝ〻蓋大原ぶ〻しといへハ煙草の火

をうゝ茶あとなあるゝ塩あるゝ
さゝ一と蔵且三ツ和の中三の白
大原さゝ下向却の猫抱て住吉稲隠
光東さゝ白意あり東さゝの時
小蛮何するもの大原社内の小石を
拾ひ借て下向仕て石を何都
より極小蛮は蔵つくる家依て
千石を法猫と称て秋さゝの時返
しもるゝ猫ゝに行る東さゝの
意なりとゝ

薩海　同

我船は小さるゝ有りたいつの沉ち
出海は略る光唐人商船往来先
許の居ゝ出海大波戸といつる方一里
の入海まて五月五日六日兩日水引の

大奥あり　硫黄樵岬　伊奈佐浦上
及び浦ゝの漁者小船を作り籠
を立一艘は六人つゝ乗り見物ぬ
櫓を以て漕連セラウアメイとけ
節して二艘並んて船の連乗を
競年ふり和の船も紀をかさり
出姫舞を為も海の小錦の波
をくゞり陸小毛毛氈おつゝき出
物龍田の盛りを一時はんるりをし
南蛮弱ゝき拝戴しとそ

南の浦田扇　同

山田ノ御田扇大神宮ノ御田植ニ五
六尺有扇ヲ作り捧ノ先ニ付之神官
コレヲ出フリ見物ノ諸人ニ令戴依テ
此名アリトゝ愚物捧の先は分ゝると

ゑんハ我これを知らず古書ニ云
御内扇ハ老の扇より少し大きくして
宮骨七本ハ宮骨六本社人数多
此扇を以て諷ひ舞ふと遠国の
諸旦家一法師の方より送るる
山伏ハ有ると此ハ邪を除く又田圃
ニ扇げも能実のり凶作なしと云
伝ふ京雲州家為の帝まて先ハ
骨ハ桧に張ハ竹なるハ事代主命鯛
をつりのふ骨墨絵板行ニ摺るる
ものゝ重宝あらしき物ニ称置
るるし

水馬

同

毀虫略注上闘東ニテ水スマシ又サウトメト云
是也然ルニ得テ水スマシハ水馬也ト思

去夏ノ句合ニ水馬ノ題ニテ藻ノ花ヲ休ミ所ヤ水スマシトミルル有是仔ノ取チカヘ也

ハル輩多ニ云々愚按此ものの諸書ニ出
ずれども虫ごまい虫ホの白あり也
ゑとも又水すましのるハ有ちゞと
あれども幾内ハそかつをむしを云
又俗ニ水ゐるハ此のなを付る評者
有ちゞハ能く水ゐるハ水上を経る
るるのゆゑ仮て名とす

水をむ

同

水海鰻干魚ニテ西土ニテ風海鰻ト云
モノ海鰻ノ小ニメ肉ウスキモノ也夏秋
京師又幾内ニテ賞之細ノ刻ミ和酒
或ハ水者トス是ヲ云ナラ云々愚按
苧環ハ水鱧とおり凡俗書ハ鱧の
字を以て苧より通字とあり
又鯛といふものハ鱧と称て市中

る黄赤色水鰌の名あり西土より
出るゴンキリハをつゝまき初め諸魚も
別ヨリ干鰌と出もとりあれ又西宮
の産物淡壓獨魚と称し摂津志出しるし
鰌と混ぜぐらんに又幾内ハ海鰻と
いふもの別にあり色黑くして
細長鰌鰌と異なり海色
穴中ニ有漁師の云ふもの毒ありと
云伝へて厭ふ蛇のまゝとして
ものもふるまふ西の宮海色
ゝてヘンビといふり海鰻ハモとふ
布字なるゝれども右ハ注するものの
あれハ和人惑ふなれを一流海鰻
の字用捨みゝ

水鰍　同同

水鰍エソノ字俗字也不詳エソハ七八
寸尺ハかり有テカマスニ似タリ肚細
骨多ク佳品ナラス是ヲ膾トスルニ細ク
切リ水ニ入テヨクモミ其肚キ油ヲ去テ
和醋佳品トナル是エソノ料理方也是ヲ
云ヘルニヤト云々愚按多識篇ハ鰣魚ト
あり訓ナヲシとなり鰍ヲホナマツ訓也
本艸會志鰍ナマズ東坡河豚モトキニ
セルモノ也周頌潛篇出字偏の所ハ
心ハ用ひて左手ハ淡ぬきく
通字を用ひ鮭鮭の形
註又自見遠て水鰍とハ鬢
のかゝ　摂州西宮の名産ニ此云
水鱧と同ゝく多く有又味ひ佳品
なる故なれハひらきて漬ハ一度

ひらなます干ま仕る天漢ゝ話
を幾間ま商ま切流ゝ[illegible]ふ是水
鏡のすゝ祇園ま載る而の産物
ハ京大坂ま拾拾ふを定む

相國寺ちんふ　同同

相國寺ノ慧法十七日大門ノ閣上三ノ
行ハル松風ト云鉾ヲ扨此寺ノ珍寶
ゝ禪五山ノ一區足利義滿公ノ寺ゝ
上立貫烏丸通二アリト云々愚按万
年山相國美天禪寺ハ爰想國師
勅請の地ゝ此ちる間ま往古の當寺
拾の株今ま存ち

志度ちる　同

志度寺ふ十七芦環及び諸
書ま出ゝり光觀音會ゝ讃州

志度の浦菩提寺又橘寺而の名
ま寄て志度ちるゝ号土人六月
十七日を十七度あるハ志度市ち
ゆ觀世音大法會ゝ隣國よりも
参詣ま中に小豆島よりハ十
七度の講を法び此日船まて参
詣ひゝ[illegible]ゝ此市ま[illegible]ゝ
酬ゝ皆て求て拾るゝ院中壹
より法經陀羅ゝ参詣の人も面白
するとて[illegible]

鞭ちる佛切　同

先祈切の祈りゝ中ハ第壹の
土人本堂ゝ西觀音堂ゝ両所ま
集り両方ま太き青竹を一丈斗
ま伐て立壹本堂ハ近江方觀音堂ハ

丹波方とて一山は院主大法華行ひ
給て双方合景を定め夢を合せて
彼大行を三ッに使て一曲りの切石の
元へ走り行早き方を勝とする事
よ入て奇怪の行ひるるなり

橘立祭　同

橘立祭廿五日　橘立祭神の社は切戸の
文殊府中との中間湯杖爲の松
林の内にあり此社の神祭なるゆへ
此月廿四日廿五日九世戸の文殊の大法
會に國中の業職の者皆参ひ
秘教に
きりんそう　同

迦世若水成章者先生なる李時
珍の肺腸より出る入日域物産の明主と
なる事此秘奥を探てあらしめ記
きりん此きりん此といふは本草景天の
別種也景天又名芝草八幡名
葉丸一別種鋸葉なるものきりん
なる葉に葉ハ多葉なるのとくるとちいさ
なるもの割葉あり彼も多葉なる
似て一不なるつき色黄に色なるもの
なるとき指し此物産是日きりん
葉ハ巨利葉景天に一説まちとめなる
と云

赤芝　同

赤柳　地錦アカクサト訓ス田野及上寺
院ノ階砌ノ間ニ地ニ付テ生ス小草也
六月小赤花ヲ開ク莖モ赤シスベリ
苋ニ似テ青紫ヲ帶フ芦環ニコレヲ

水草ト記セルハ誤ナルベシトカ々愚按
菱ハ花俗名ヨシテ多ク地錦ハ
和名ニシキクサ又イツマテクサトモ云秋
紅ト生ル大小共ニ多ク出ル
草環及び諸所ノ水草トアル脈の
有形ハ河小ノ菜園ノ主醫ノ見
ねハ池の面ニ浮ルものハ俗名
藻赤ノ藻と云六月ノ小白花を開く
花を云フ又園中ノ蓮ノ一ツのねを
もむ水中ノ石を蔕をかくしたる
所樓あり
ヨの云これ赤藻トモ石藻
トモ云シ谷川石間ノ生ルを心柴ハ
ぎしくのちいさきものにて三寸計葉
一ツ根一ツ葉ノ長サ共に赤し六月ノ
至リ落葉く紅をとりしるめきのね

初鰹

一莖一節咲く日に生ル白い葉紅な
遠ノ通リ平色諸ノ蕊ノ多ク
名ハ二葉とあり花ハ有ラン
先ハ水草ノ六月ノ花候ものニ種
ありをつ白きハ水ノ花トなるハ
誤リなるべしハ別誤リ成ル
云ふし　同同
夏ブシ鯉節也松魚ヲ制裁シテ節
ニ作ルヲ云也トカ々愚按「鰹節」生節
ハ皆夏ノ生ルを出ル故ニ夏節
ト云ハ夏節トハ云ハ考古人
の論師　鰹ハ夏小兒の顔面頬ノ
名もあり鰹節ハ出ルを夏節
と云夏蘭の花言ハ依て霍
乱の上ノ病神を祭ケリ

雪を持病祈なれいとなれら祇
園の杖し椎泥鰐を用ひてくらけ

同

海月 水母 海蛇 泥海より生ず
本邦俗茅筑茅なれ共成る也
月多く出クゞといふ事を繩なく
て綱綱と柁をおて法華平中
流れ入を取て塩を製せクゞハ
俗茅の方言なり其のうち大児
島より多く出ず

ねりひぢり

同

海り雲雀 毛をふるを一説
に音入ヒハりの畧語なりといふ 蟇
に語る音を入る時節なれ共も
なくれとも是ハ隋書の説なり

音を入るを云雪をするハ蛍の
雪をするハ練雪雀し

六月条

同

六月条に皇極皇寺し従三位小墾の墓
建立し宣海命婦ことに居を往古ハ
平安城の葬不し源氏物語に相つが
の喪衣を雪鶴よりふる平横いうめ
しう住てと出るも生和し墓英泉
一面ひとい一る寺地さ寺ハ
ようをなくし一宇も今ハあと斗
の茅庵なる茅師 洲 作り是七仏
四し往古のをくぎの寺ハ是なり
今二丁不と西なる念仏ちをを
ぎと云混ずべくず

一反鮮ゝ子

同

夏解(ゲサイ)　夏中二行ヒハメス僧何ニテ
モ茅(チガヤ)ヲ糸ニテ結ヒ且越ヘ送ルヲ
云ヒヲメマキニ水葵ヲツカネテ送ルト
云ヘル出所不審云ヒ愚按ヲ[illegible]
浙右(セツウ)僧(ソウ)多(タ)ノ縁ヲモテ茅ヲ
つくりて且越ヘ送ると云て水葵とい
ふ　茅の字を以て解釋する
先本文ヲ伺ふに茅ヲ糸ヲ[illegible]
と何る出所いふ　先解文ヲ本
按ヲ知ぬ故ヲ誤りなるべき
ヲ誤ル　釋氏要覽雜記門ニ解
夏(ゲ)(サイ)今浙右(セツウ)僧解夏日以絲束(イトツカ)茅(チガヤ)
以遺且越謂之解夏(ゲサイ)今詳此(コレ)
已為五分法身座故名為吉祥(キツシヤウ)云々
下略ケ程(ホド)ハ吉祥ヲとあるを何ぞ

も茅(チガヤ)といふんぞや茅(チガヤ)ツクリナヤサイナと訓
て食物の心吉祥(キツシヤウ)の清浄あるとと
ヤ云ふ遠ふ　又本文ヲ何ぞ
とある意ヲ抜いて水葵たりとも答ム
つきてるにあらん

峯入

（本加歯ノ説秋ハ逆峯ト云ヒ春ハ順ノ逆峯ノ条工再引スベキ事）

峯入聖護院三寮院ノ御門主一世
三度ツヽ吉野ノ奥金峯ニ登山シ玉フ
日本宗派ノ山伏屬之春有ヲ順ノ峯
ト云秋有ヲ逆ノ峯入ト云ト云々愚按
草環諸書ニも本山七月當山八月と
為修験の説ハ本山八月當山七月ニ又
本文の注ヲ伺ハ所逆ノ峯入と
斗ヲ伺ハ注せるも同　依て有情
を注ス本山とハ天台宗聖護院宮

御門主なり當山は眞言宗醍醐三寶院御門主の先順の峯入とは
天智帝御宇役優婆塞名小角
加茂役公氏和州葛城上郡茅原郷人其神異可謂不測者焉
天皇六年丁卯行者御年三十四
歳春葛城出熊野經大峯踏
分玉フトゴ是ヲ所の峯入の權輿として本山の御古格に春毎年代參順
の峯入有り所は本山でうに秋は
逆峯又逆の峯とて大峯より熊野
へ下ぬけ本山當山兩御門主一世に一度踏
分の峯入秋の峯入毎年は御代參
あるに又當山とは醍醐三寶院
を祖とせ僧正は濱州の人先仁帝

逆峯ヲ再可スベシ

の後流れて眞雅僧正の弟子に修
練を好て名山靈地を遍歷せぶるに
初中年大峯の嶮徑行者の後斷
て入人なし僧正荊蕀を引きらひ
遂に上下の道節を思ひのまに踏
開れより苦行の山伏お續ひて峯
入するに中興三寶院僧正の往先
に貞觀の末醍醐寺に開闢さるる
それより大峯の座主兼ねる
僧正の法流言伝へ
こと山祭　同月
三井山祭廿七日信州諏訪郡此祭三芒ノ穂ニ
テ仮屋ヲイクツモ作ル則小社也是ヲ穂
屋ト云フ暑物諏訪の神社上の社は健
南方命下の社は下照姫命ニ大已

貴のゆるし上下の社湖水を渡る
一年一七十餘度の祭奠故ゝ諏訪ゝ
と神八雜ゝ元祖の蛙將三月廉の
樣耳さけの神る才諸ゝ出ゝ
ゝさ山ゝ有ゝ諸事ゝ七月廿七日と
ゝ貞徳八月ゝ有ゝ
ゝ文のゝ穂ゝ仮屋を作る
是神屋有ゝ此舟白晝ゝ三光
を見るといゝゝ山ゝ此舟有ゝ又
洛陽ゝ此神を祭れる社二所有
今諏訪の町これゝ人家の裏ゝ小社
有ゝ往古ゝ源ゝ此ゝ有ゝ
ゝ菓子ゝ蓋ゝ穂屋香
炉有ゝ此ゝ
室中ゝやはせ

同同

室ノハヤ早稲大和河内江湖邊ノ古風
アル農家皆居屋鋪ノ内至テ日向
ノ地ソレ〳〵ニ淺水ノ池ヲ構エ能暖氣
ヲウクルヤウニシツライ春ニ至テ米
種ヲ浸ス是ヲ室ト云也既ニ御傘ニ
晩稲ノ種ヲ浸ス所ヲ室ト云ト迄
ハ記サレタレトモ今少センサクトヾカス
シテ田夫ニ尋スヘキ事也ト書ヲカ
レシナリ是貞徳ハ京師ノ好士ニテ
民家ニ遠キ人ナルニ依テナリ室
ノ早ワセトハ其種ヲヒメシタル室池
ヲ則田ニ拵エテ五月ニ早稲ノ苗ヲ
植ルニ外ノ地面ヨリ各別ニ早ク成
長シテ實ノル是米種ヲ浸シメタル
精氣地ニアッテ甚地暖ナルユヘニ成

長實トモニ至テ早ミ是ヲ則室ハ
ヤ早稲ト云ヤリ畧 愚按此所河内
生駒山の麓殊しき農家より生れ
てよく好意せり 祖師の出家され
しるハ信生 ゆるせい常よせぶ
るる 故筆しめ農家の
修室まて爲所しめふる為る
千梅さまてあきるる
ぎあり しく紙墨を費しの
美えて隣より 沸騰と云る
不ハ 木積の社とあり 六月十
四日 神事ハ 沸騰の上此名ハ 年産
の稲穂をふくさせ 沸騰所沸
平 稲公武 もさし上る例 生稲
平 遂遂ハ農家の秘すし常

の農作ハ是よりいとん 天地の気
順ようる 村ハ実のり多し 事
を以てする 村ハ多くを持るといと
徒益なし 以てせさる不し 呉作
集ハ田室まる 苗ハちし 秋の色
遠ハ 那いり 同注ハたむ
むるやせとそ 陣不ハ
に田を作り 有るとし 籠城陣不也
きとき ハ兵粮の用意ハやくも 実
のくせあとする 諸書ハ出う
ハを以て 負徳義 ハ 書れ
代農夫 あつけられ 有る
きる道を示んせる不し

菩薩祭

同 注

菩薩祭是海神祭り也ボサトハ天地菩

薩ナリ媽祖神ト稱ス海濱ノ福ヲ守
ル神也トス々愚按右注ハ祭日モ
不石詳先菩薩祭リハ八月廿二
日也紀州ハ唐人入津の
船の艙ヨリ船神を奉る船ヨリ礼禁を
立ル暮上下ヒしヨ金鼓をいし
てとゝくゝ船中ハ媽祖本
福建興化林氏の女自大海ヨ没して神
ヒ成神異霊現海の船を守る天
妃聖母の号を諡ル觀世音の
化身ヒ神形天后の束帯ヒ
玉冠の上ヨ孔雀を戴き左右ヨ侍女
翳を翳ヨ又関帝神を奉るあり
各異邦の志に随ヨ入津の時神を
祀ル下ヒ十禪師村唐人屋鋪

入路次金鼓喇叭を鳴ス厳
重ヨ守る護ル物帆又ハ櫓又ハ崎
ヨ唐人代寺ヒ南京ハ興福寺福州
ハ山宗福寺漳州ハ福衙寺各禪
宗黄檗の末ヒ八月廿二日ヒ
にて菩薩祭リ有唐人十日ハ金指
して黒き棒を以て踊る事を芽
踊ヒ云十禪師屋鋪ヒ奉ル
近所ハ長崎市中ヒ住ル唐人
金指の道ヨリ祭れる小ハ四辻
ヨて踊リヒ奉ル子細異ハして
甚興あるものゝ芽祭リ芽踊ヒ
秋ヒ

船ヨリ

船ヨリハ正月元日小船を作る

備後國鞆浦の社船玉命ト部
兼邦の説佐田彦の命と云て神傳
曰神功皇后三韓征罰の時此浦
にて船攝を掛あふ浦の地名にて
船の鞆を以て神宝とす故に船玉
神を初りあり依て今鞆と号
けると云

佐田姫　同

龍田姫秋ノ氣ヲ主トル造化ノ神也春ノ
佐保姫ト同意也神祇ニ非ス非ニ名所ノ方
葉ニ只造化ノ神ナレハトテ春ノ歌ニモ
ヨメリ依テ連ニハ春秋ニ用ユトリ俳ニハ
春ニ不用ト云々愚按百番第九梅
所ヨ我去ハ七日ハ過ハ大つゝ姫蓮華
を風ふちゝ生ふ神中抄ヨ形服の説

あり連歌見を引て其秋ヨ用ゆ
とい千梅連歌をふ吟味ゆかる
る説あり法師の説ヨ依せて連
歌ハ不用佐保姫うつゝ姫龍田
姫ゝ姫ハ四季の出家ヨ形然う
彼ゝを春ゝを秋を出
ハ誕式の用捨ゝ連歌にうつゝ姫を
みゝヨ用ゆ言抄南山上人の説
ハ龍田姫佐保姫名ホとあり又
新式の説ハ立田を立て龍田姫ゝ
ゝと宗砌の説ハ立田姫ゝ立て
立田ホハ但ゝ作者ヨ依る
中ゝれき是ト立ての言論あり
誕説ゝていたゞ秋の山ゝを雪ゝ
造化の神ゝと心て白作す

連哥式諸書より遠くるハ宮柳の但し
作者まよる〔しの説を悟ず〕
凡四季の姫ハ詩歌の作例なれ奥儀
を待て以て生作者の心まよる〔べし
とのまよ〔あるゆ〕へ諸説まち〔〕不統
待て以てゆれハ諸説皆一理あり〔〕
れハ非なりとせんや桂籍義の曰詩姫
四季の間ゆえも神祇のごゝ〔し
といへ〕ども故実をもとゞきて新例
を出ス道の思れもあれハ心を
先ず知ゆて一座連衆ゆ通り
心を以て遠意す〔しロ外〕出ス〔べ
ゝとゝ
宮法のもの巻　同

宇治ノ花園是昔宇治ノ殿宅花

園ヲ云トリ云々愚按宇治のも園のる
連哥ゆてハ名寄の所を以紅巴和
て対白ありしより連歌の出ゆ此
名目季るとして生ス一本ゆ云紅
巴ゆ新〔ゆ宇治の花園ハいつの
世ゆ誰ゆ植〔らしとも来考とゆれ
とし云て宗砌の説ハ為経和尚の
所より遠云ゆ付て多るとあり万
葉集抜ゆハ秋の花園ハ宇治の
花合セ宇治の草合ゆど所者とあ
ゆ文の説ゆ〔べ
多ゆ
同
通俗志ゆ三秋ゆ反る部〔多ゆ
四字〔四竿〔燒しあ〔添の〕引板簾
響と後けり先多ゆとハ趣名

まて菓人形及ひ四季いろ〳〵の立ま
を以て農まを多をふせく山田平田ま
立おくなり案山子のみなを菓人
形し

四季　同

四季といふは百葉の香まをもめられて
栗穂きゝ[illegible]あるし四季
抜て海ら近くうるひ うるひは長
子男女とも十三とのの祝号なり
竿此先ま四季をつけてそれを
持て四季して山田あるは栗園木の
精をふせくし

焼しめ　同

焼しめ焼帛と書て四季ようは焼
帛ゝてん小山田の我ま也稲を麻

もこそをめ先は百姓の居繁を勇
てをさゝそその降りを焼て田ま立
るしそのかざををぎて麻のをきぬ
しそれを焼しめと云し家の[illegible]注は
うく秘義秘まをゆんじてこれは公
の法ゆたし言の尾[illegible]ゝは不所
農まの用るは何にても獣の毛皮
山まて焼なり一夜焼は面ふるとは
平奥絶ぬ面ふれは平奥忽散
し失るゆくみあゝをを焼すし

除火　同

流水宮祇の注まは俗都とも
後古今集ま山田ま[illegible]
こそ悲しれ秋そぬれとは人も
なし　清鑾の説ま此ふ[illegible]

人ハ知ラズ」との高論季吟悟山の井
の注をいて知る」「季吟曰ク
ハ流のと水辺よりうけて水の力
を添て音を出す庵也」又云石川
丈山老人門外ニ竹を作りて平
み字平板を小庵堂をもて季吟門
ニ」の平師流ハ住て蓋ハ
りし平板ハ明と記されし流ハ
先の大井を使てかくるを仕ケ
亟谷川より水を引行ハ水流れハ
一方上ると別水あるとう」て音
を多ハ諸ハ響く面」水ハると元
のごく流れハ上りかぶるを意
おとし」依て農ま俳部ハ白といり
水を流ふみ書ハ此

引板

芭庵集彩阿の家ハ小山田のひしゝの
ふけ縄何と共仮の世せハんひくらん
諸国の家ハ遠ハ近ハ田村良我ハ
しハ長ハ引ハ多ハ田ハ植ハ
しを蛙ハ鳴ハ引板ハ引ハ
縄を方ハ此樹木ハ竹縄して蛙ハ
に張ハ引ハ音ハ響縄地ハ垂
るハ所ハ竹を立ハ
して相谷川のハ引きハ」板ハ縄
を付て引ハ音ハ」細縄より水
上ハ引板ハ引ハ勢板ハ世ハ
と方ハ引ハ一時ハ引ハ
を以て引ハを引板ハ
と云引ハ音ハ止む時ハ

樹木なくていかけ縄の如く谷川なくていたるくるる事能依て水田
植物は二月去し平中國行脚の時
陽城山なる月し伯耆英作西播
而てまたを見るるくるは見れい
ヒキイタと云ふ東國いたるに幾
内はいまるい芝を見ぬ

かぢう　同同

カミカ石斑魚也種類多シ加茂川
ニテ極テ小ナルヲゴリト云畧　愚按ニ
鮠多シ　鮠石ぶ　いなもれと　古
人の白も見て居氏はよくて石ぶ
なしに所ハ而てにあるにきて有馬の
湯山川は多し　鮠は多れい　同季
鮠　同

鮠　参　昔年中行事ハ笠とり参と
あく笠をあくるはあるに山崎宮に
笠原山は神社あり　清瀧権現と
唐土清瀧寺の法寺の神を空海此
所は鮠　山上の窟　鮠　鮠
鮠の結ぶ神と山の名よりせて笠原
祭りと云　秋季なる　鮠あり
住吉寶の市　同同
住吉寶ノ市九月十三日ノ夜并市也此市ニテ
買求メル弁ヲ以日用ヲ達スル者ハ富
家ト成ト云傳フ故ニ寶ノ市ト名ツク
ト云々　愚按寶の市十三日夜といふん
也蕉翁弁買て名別登る月見
ぶき白よりあと必ずれるが
誤りく通俗志は寶の市非夜分と

又草環ハ住吉相撲會十三日座とあり
是をぶまと云ふしいづれも表略なり
此法神なるハ相撲会とやゝ似たり
ハ經て宮の市ありしと今ハ神の
寶の市ハ諸國市の始なり當社
に市をやる法神なる事由ハ天孫
瓊〻杵尊の御子火明命十三世
を田媛の宮祢と号神功皇后三韓
御征罰ゟ後民を皇后本土に帰
せのひて後神秘田媛の宮祢初て
神主と成是より七性の氏人分る
大頭 津曳 板屋 狛 大宅
神奴 高木 代〻氏人神孫〻田媛
の宮祢の宮市優の命と号是市
をやるの法神〻支ぬの靈を法

ふしておもとの法是〻地主神氏
又法ふの神と云神秘の御社津曳
の遠祖の神〻此市姫の命ゟ
始り又玉ゟ始ハ二隅南殊の秘説
あり地〻此ゟ市を〻初宮の
市是〻〻世俗体を求るハ隅殊
の縁法ゟ初て隅殊の祝法なる

住吉角力会　同

住吉祝部大宅姓日九月十三日ハ
相撲會と申神輿玉出嶋岸ト頃
宮へ渡御御仮屋殿又行宮法藤〻傳〻供あり
俗ゟ法傳供と云而氏津守の神
主勅使代として宣命を読上る
相撲十三番童相撲三番有角力

者[illegible]積皇禅の上は注連を引きと
ひてゝ会をとゝ今日の御神楽
末の刻より神輿還御せと云ゝ
天王寺一乗会　同
常環は一乗会十四日とありこれ昔
は毎日一乗会九月十四日　大念仏会同十五日
毎日とも夜は入ると舞楽あり
式一乗会は二月涅槃会と同じ
うしとそ今世十四日を慶して
十五日大念仏会行る歟
太秦牛祭　同
太秦牛祭九月十三日　摩吒羅神
云法法の法は毎日遷ふゝ常環廿二
日とあるは八月太子会と見遷てる
ゝ山城国葛野郡太秦広隆寺桂宮院内は伽藍神大辟の神
社なり祭神素盞嗚尊皇帝之と牛頭
松尾を興して神なるゝ牛頭神
人唐冠を戴きあるき板面を切て
はけ牛は系ゐは一匹を切り
同じく分従ふ士人各唐装束に
板面をけ唐冠は花をさゝ洛
なんと持て行列に牛は系ゐれる
祭人祭文を読上る祭文暑天祭文天文
十八年九月十二日上宮太子御作なり
秦氏の祖集大笑をなしそを
神祭とし称なゝ上宮太子秦
川勝は命して御子創より千年を
ゝりても牛祭り絶さるはと云ゝ
法なるゝ

○摩吒羅神は素盞嗚尊

城南神祭

九月廿日 城南寺ノ社ニ上鳥羽ノ里ニアリ鳥羽ノ上皇ヲ祭ル神也此所平安城ノ南西ニアル西南ノ離宮ト申ス也下略 愚按城南神ハ山城紀伊郡中嶋ニ祭る上多日中多山竹田の兵神ニ延喜式ニ真幡寸の神社とあり日本紀略別雷の別ニと出ル只八多日の上皇を祭ると有て平意遠ふ依て注ハ此他ハ人皇七十四代多日の上皇の離宮ゆて上皇法号世ゆ此神をことゆ崇敬厚く伊勢原氏略春日松尾平野稲荷を合せ祭て不易代ニ太神宮と御注ゆふ安楽寿院の伽藍

神ニ安楽寿院ハ上皇御ゆ創ゆ法号鳥羽を号るの下ゆ葬りまる法住ニ安楽寿院ハ上皇ゆ言新宮の一本寺ゆて今ゆ断絶ゆ城南ゆまるとも中城南神の社と相去事五町半ゆりの日神輿二基あり一基ハ多日の上皇の神輿ハ安楽寿院より祭ゆ日ゆ城南神社へ移る是太神宮を上皇御拝の遥式ニとゆ勢ゆ院の一箱社ゆて行ひゆ果ぬれゆ上皇の神輿ハ安楽寿院の皇家祭ゆ祭る城南神ハ社人ゆ之二基ゆ並ひゆ時神輿の棟ゆ多るあるハ城南神又日光のあるハ上皇ニ此方を以拝ゆる人ゆ

たゞ神宮の帝とゝ為て
お遷宮今世宮殿の帳は白布
を以不易大〻太神宮と云記あり

小さゝし江鮒　同所

小瀑江鮒（コサラシエフナ）是論物也或書ニ江鮒ハ泥
ヲ喰フ故ニ泥臭キ所アリ此コロニ至リ
其味能成色モ白ク瀑ニメルカ如ニ依テ
名ツクト云リ此説不得心也苧環ニ紅
葉鮒ノ下ニ出ニテ境ノ浦ニアリト記
セルハ如何江鮒境ノ浦ニ限ルモノニ非
ス又江鮒ハ鰡（ボラ）ノ一名ナレハ是鰡ノ事
也ト云ヘルモ有リ鰡ハ無季ナリ彼
是不合ノ説也按スルニ是小瀑江ト
云江ノ紅葉鮒ニニテ昔京師ニ多ク
出シメルモノト見ヘタリ小瀑江本朝

名所志ニ見ヘス惟ニ泉州境邊ニ
有ヘシ私ニ名ツケメル所ナトハ後知
又所モ有モノ也又古記泉州ノ海鮒
古來ノ名産也チヌト称シテ形鮒ノ
如シトヲ〻上古和泉國ノ本名茅渟（チヌ）
ト称ス依テ攝泉堺邊ノ海ヲチヌ又
ノ海ト歌ニモヨメリ則チヌト魚ヲ出ス
海鄙ノ二字チヌト訓セリ是等ノ
コトヲ云カトヲ〻愚按苧環ハ彩菓鮒
小瀑江鮒（堺の浦ヨリ）とゝを二名を
混雜せるもの歟ふるき先行菓
鮒ハ鮒なり真桜魚の陸トハ注
せるもの歟真桜賞歟しそふしめ
るものゝ又小瀑ハ瀑ふるのてるゝ
通俗志三季海ノ小さゝし洲走

江鮒と出せり皆鰯のるゝ諸説
大成云鮸（イナボラ）和名口女又鮸（ヒフナ）又
江鮒小さゝし洲走伊勢鯉名吉（メウキチ）皆
同物ゝ俗ナヲシボラ（メウキチ）伊勢鯉
小ゝ洲皆ゝ季ゝ せんゝ出るの不て
湊ゝ多一千苗拾州川ゝ多し
浦迄き江ゝ生せる成江鮒といふ
所四五寸ゝ五月て江海の淡水
を住其ゝ依て洲走りの名あり
八月ゝ及んで堺の浦ゝ多く出を
取て京師幾内の市に賣小さゝし
小ゝ俗名すてなんそ蓼不有（きや）
芦環ゝ小さゝし江鮒と有ゝ古人ゝ
叮嚀にゝ小さゝし江鮒とおれしり
通俗志ゝ小ゝ小さゝしとる字を

用ゆ小さゝし京師幾内の俗名と
ゝ出て季ゝとゝ出るゝ頃秋ゝ至り
て大海ゝ出ゝして季を捨ゝ
又ちぬゝ幾内にていちぬ鮒と号
鮒ゝ似て色くろし下品のものゝ

住吉沖送　同

住吉ノ神送り九月廿日俗十月諸神出雲
臨行ナル中ニ住吉ノ神其鎰（カギ）預リナル
ニ依テ諸神ニ先達テ九月廿日ニ臨行
ニ玉フト云能説ハ平話俗談當用ナシ
如是ノコト季ニ用ル勿論ゝ云々愚物
予ガ大成の為ゝ述る為て記一云り
住吉祝部大宅氏の曰ふ小ゝ
いとり神送りとゝ小ゝ神楽玉出島所
仮屋厳ゝ仮所ゝ菅（スガ）の板有見蒙社秘極の

殿

抜ル又ハ仁徳の南薩ヲ風土記ニ少シ有ヨアルニ出
雲石といふ所ニ於て大社宮祇園
を拝ぐ出雲遥拝のる有由非秘
先當社の小ゑり沖迄と世俗ハ
中ハ是し祇園ハ負徳の説ハ
小ハ極陰と極めて可拝又沖奥ヤ社
より後沖還御則先沖の旅し旅
和といふ所ハ宮ありり

船一

たつ　同

竹瓮　深キ江ノ底ニ沉メテ魚ヲトル
具其形九小籠ニシテ口ニカラクリ
有沉ム時ハ口開キ引上ル時ハ口閉
ツ是ニ餌ヲ入テ湖底ニ沉メヲキテ
雜魚蝦ヲ取ル尤冬月多シ湖西堅田
ノ漁舩ニ竹瓮數百ヅヽ積ミ沖ニ漕
ツレ出テ沉之ヲ漁人ノ産也ヲメマキ
ニ筌ノ字ヲ用ヒヲケリ非也筌ハウエ
ト云モノニテ流川ニフセテ魚ヲトル
具也メツヘトハ大違也愚按筌ヲメマキ
筍通俗志是本艸ヨ魚筍魚をとる
ヲ簀ヲとる字ハ正字不知而論
ぜざるもの江湖ばかりに限るへ
からず幾内の漁者冬月用ゆる具
さまくあり予ハ古ヘヨ忍知川と云ハ
此ばかりヨ於樗蒲搦袖とるを云
つる漁者ありて四时漁を業とする
たばべとふものをとる魚とる
具とあるまたよりて宜ばるおちよ
云へらくそれハ他國ハてメツメの
するしそまてハと出ます知ノ

其別し河内まてチンドウ又カヘルも
いふものしそ之ハ不知今千梅
の話せるものし依て大成に筍
チンドウ一物ありと話ス

氷魚　同

氷魚扨此氷魚ト云モノ江湖ノ名産
ニシテ他州ニナシ伊勢江戸ノ江ニ有
白魚ヨリ勝テ潔白ナルモノ也江州里
及ヒ網代ヲ打テ取之堅田ニテハ攪網
ヲ以テ多ク取リ然ルニ或書ニ曰古宇
治川田上ニテ取リシ氷魚今ハ勢州
三州駿遠ノ海最多ク取之以竹串
貫眼曝乾鮧ト名ヅケテ諸州ニ送
ルト云々是大キニ誤ノ記也其鮧トスル
モノ氷魚ニアラズ白魚ノ類ニテ別

モノ也又大和本州ニ宇治田上堅田ニテ
冬月取ル氷魚ト云ハ鮠ノ苗也ト記セ
リ是又大キニ誤レリ皆書籍ノ上ノ
沙汰ニテ推量之其生物出處ヲ見届
サルノ誤書也如是湖水ノ産魚ハ江湖
ノ者ヨク知之氷魚ハ鰍魚ニアラズ白
魚ニアラズ勿論鮠ノ苗トハ大キニ格別
ニシテ冬月有テ春季決ニテナキモノ
也色サナガラ氷ノゴトシ白魚ノ純白
ナルト別ノモノ也此魚ヲソラク他州ニ
ナキモノ也新六帖氷魚ノヨル近江ノ海
モ風サヘ又田上川ニ網代ウツラン衣笠
内大臣云々愚按氷魚の薄沢詳なれも
徳川の助とあらんそまて物産の
粮ケ案大和本草篤信の意を攙ひ

て亥より亥つて篤信の源をあらる非ざるとかいさん黒ん山上の作又氷魚の希多〻是も非も有白魚なるもさよ鮠なるもさよ鮠とも三相ハ雪の雪よりして氷魚よりかいるよりあらん又お混して白作まるもあらん平もの名をもて雪をけんる明白〻又却そらく他州よりもきと例の湖自慢の高言吟つゝし玄恵法下の作せるれ庭訓の往来氷魚の注よ出雲て又宇治川よりとそ書籍はりこもあらん中國小海伯州弓の濱出雲三保の笑より入海とより袖師弟の浦てを経て山すく松江弟城下末次白潟より

る大橋あり是より湖水となる此湖豎六里横三里俗完道湖と号此湖より冬月ハ氷魚あつてこれを取平彼土に於ふの時ある日湖水の辺の亭より招れ賞意に氷魚俗称潔白なるるり雪のを上等の佳味定めて彼の船白魚の化るん号ハ氷魚庭訓より出せる氷魚といふる名物をせしめり又庭訓を以て證とするに定めて雜書所より後とおもふ庭訓ハ菅原の明衡の撰いれ明衡往來同作新中樂記両書を合せて文を和らけ玄恵法師太平記作者の撰いれしものゝ平書墨薗も所りゝ朝鮮の書經國大典より庭

往来を引書ゟ載せしりト云ト南嶺説

枯野の露　同同

枯野ノ露御傘ニ秋也十月ニ出セ共
御傘ニ見誤ルモノカ御傘ニ枯野露
霧虫色ナト結ヒメルモ秋也ト云り
又クタラ野ト云ハ冬野也商ノ字又
杼野也ト云ト愚按萍環ニ十月ゟ出
竹亭湖十御傘を見誤るゟあ
諸出ゟ先あり先ハ雪吟の指山井
ゟ十月ゟ出されしり諸出是ゟ
先師の白山ゟハ雪吟の同拵なり
枯野ゟ勿論なり霜ハ四季ともあ
るものなれ霜斗をゟ出れ
るハ古く通俗志ゟハ法傘の
説を知ゟ是ゟ一流の同拵なり

誤ゟ誤ゟいゟゟいゟゟ

夜興引　同同

夜興引冬ノ夜山中獣ヲ獵ルニ犬ヲ
引ユヘニ獵師ノ詞ニヨコ引ト云也
獵ノ内ニテモ先雪中ノ狸狩ヲ云
トソ愚按師説ゟ夜鴨を取
ゟ云何ゟ せよ夜の獵なり業
とする獵ゟ限るゟ季ハ
指山井ゟ先鴨夜興引
鴨鷹ゟあれハ獣ゟ限るゟ
ゟ雪ゟ

相嘗祭　同同

相嘗祭上ノ卯ノ日是ノ祭神祇令ニ
曰住吉　大和　三輪　宍師　恩地
意富　葛城　鴨　紀ノ日ノ前等ノ

神主各官幣ヲ受テ執行之ト云々

愚按右の通り公事根源の通こをまなび為ても九社し是を正さんして本書又九社し家まるる公事根源ヲ作神祇令言とあれい神祇令の本書を脱さるれ他の不吟味又千梅の不吟味とある也云ふ根源ハ一社つ

閑字あくはけて祀しあるゆ九社と心得るものし八社し 住吉振州神主津 大和 和州山辺郡神主大和忌寸 大神 三輪神主大神氏

宍師 河州城上郡宍師神主 恩智 河州高安郡恩智神主 意富 和州十市郡神主 葛城鴨 和州葛上郡大朝臣 日前 紀州名草郡日前神主

神主の事ハ神祇令集解ヨリ葛城と鴨ヲ共二社と心得るなり

小忌衣

同

小忌衣大嘗會豊ノ明リニ用ラル、モノナリ山藍ノ花ニテ摺タル衣也是ヲ則小忌衣ト云也小忌ノ殿上人ト云ハ此日御神樂ノ役ニアタル殿上人也ト云々愚按小忌衣の次第寸法ハ委のるるる悪あれハ只祥閣法式の端を去分付り山藍の花にて摺るものよあらず山藍の葉し先白布を粉張りて小子板柳楮山多ホを山藍の葉斗取集あてこれを摺すり板口付あるるとそ山藍ハ能地より出るるし急之時ハ他の艸を以て摺之口傳也摺の衣とやく去級濃ホ并藍ホ茅おし小忌の肩ホ

ゆふる一丈四五尺三組ニ又結きて
為小忌ハ右の肩よりけ〜ほ翁人ハ
左りよりけ〜る口傳闕腋のぬきのもの
心神ト俗りくてまゝ故實口傳多りれハ
是を畧ス堂上堂下小忌を召ス皆
白めなるなり新勅撰巻の賞白の
前よりいりなれもっさの花ハ実なるゝ
小忌の衣よ実のおくらん

日うけの糸　同同

日蔭ノ糸冠白絲或ハ緑ノ色絲ヲ
組メルヲハ條冠ノ左右ノ角ニ懸ケ
垂ルヽ也是ハ畢竟松蘿ノカハリ也
松蘿ハ生ハ至極清ケレトモ猿芋
纏ト名付テ其形バサケメル苔蘿
ナレハ今錦繡ノ美麗ナル衣冠ニ
ハ取合ズ依テ今世松蘿ヲ止テ日
蔭ノ絲ノ鮮麗ナルニ易トリ神代
ノ古風モ自然トスメリ物毎只美
麗ニナルノミ也ト云々愚按是妄説
ミチ板地トして上を斗るの用ヒ
乱れ〜ん神代の古風まさり美
麗ニ易あるハ恐れあり是皆り
故実あるゆへ今世ハ多むる
るまあらん一條禅閤法説ハ冒蔭
の糸但立ち丈二尺斗ト云々又平治
秘記曰日蔭蔓絃冠巾子ニ青糸又
余ハ生蔓を用ヒ少人或ハ紙物を用ヒ
冠の上より二筋垂ル也今度嘉禎大嘗會
通成朝臣用青糸日蔭ヲ實基卿曰
尤有其謂ト云々此説ハ尚習ある

すなれハ上を憚りてあしさまに
故実あつて来るとけふ上ハ以下
皆生物の蔓也

御火たき　同日

御火焼八日則子祭也諸社行之中ニ
稲荷ノ御火焼最重也京俗ホタケト
云フ此日灯心ノ売買ヲ子灯心ト云也
ト云々愚按をこてまきるに御火焼子祭
吹革祭八日とつゝけあるゆへ混雑
て御火焼八日則子祭りといふ何ゝ
それは三ッの物ハ各別也かゝる
を蕉門に用ひて千載の笑話と
なるなり西に行ゑへしかくのる
遠国の俳士に伝へかさるへし故に
來ておもきの外ノ楽を以てせらハ一し

御火焼オホタキ オホヒタケ　一此日を出するハ諸
社の祭日定らず故也御火焼とも
此月諸神の祭有神前にて執行ふ
鞴燎是あり十月ハ極陰の時節なれハ
神ハ陽にて潜ふせるによって十
月ハ陰に伏して神祭なし只
祭月とするハ出雲斗也此月一
陽来復なれハ諸神本土に帰
らせ給ふといふも理の当然也火ハ陽
を以て迎へ奉るなり諸記に出すり
神来月に庭火あるなり八日に限
るなりあらん子祭り八日にあらん
十一月甲子の日京師秘用の民俗
大黒天を祭る十一月に甲子なき時
初の子の日以て祭るなり皆灯心を求

疫病ハ灯ハ疫病又災をのぞくと
民俗の風流なり子灯ハといふ吹革
祭礼八日稲荷のゐくけ山三ッの
ものをひとつよりて名八日子祭
りと学くるハいん

子祭　同

子祭り十一月甲子の日京師幾内
の民俗大黒天を祭る黒米黒豆
を飯とす　二股なる土大根華付
きて供ス大巳貴尊ハ日本万邦の
神一神なれハ干支の初ゆ祭るる
外理なれハ十一月ハ甲子
の日なり世ハ初の子を以て祭る
儒家の説ハ周世子を以て祭首と
す日本ハ大巳貴を祭るる可し

俗ハ嵐ハ大巳貴のたゝりとなす
考ふるハ灯ハを求め疫病ハ
灯ハ疫病又災を除くと民俗の風
流なる灯ハといふ

ふいこ祭　同

吹革祭り八日稲荷のゐくけ祭り
祇園吹所清水師一切吹革をもち
ゆる法職ハ日稲荷を祭る中も
祇園ハ毎日ハ金銀の飾きりをして
八日ハ祇園祭十一月七日を俗ハ
祇園祭の前季といふ

大師講　同同

大師講十月九日天台大師ノ御忌日也比
叡山三井寺其外台家皆行之庶
民家ニ小豆粥ヲ焼テ食之近江ノ

國中殊ニコレヲ嚴ニスト云ヘ愚按天台
大師ハ傳教大師の法ヲ受て六月
四日也今日ハ天台智者大師の御忌
日ヘ

○寒苦鳥　同

寒苦鳥此鳥吾朝及中華朝鮮ニモ
ナシ佛經ニ說タリトソ天竺印度ノ境
大雪山ニ鳥アリ名ケテ寒苦鳥ト云
此鳥夜寒ニ苦ミテ鳴テ曰寒苦
身ヲ責夜明ナバ巢ヲ造ラン明テ又
鳴テ曰今日不知死又不知明日何カ
故ニ巢ヲ造ツテ無常ノ身ヲ安ク
穩ニセント此經ノ心ヲ後京極攝政
良實朝ナノハ雪ノ太山ニ鳴鳥ノ聲
ニヲトロク人ノナキ哉以上師說ヲ以テ

當座ニ書記シタルマヽニテ再聞セス文字
言句ノ違可有見之人其趣意ノミヲ
可用ト云々愚按師說文字言句ニ
お違はすハ眞仏集ニ多出
同云拔て雪山ハ涅槃經半偈投
身より位をまして無常を唱ふる
山ヘと云ヘ又萩の拔形おゝも多く
出ッ諸お二も出るいとも六ケ敷
ものヘ日本にあゝぞ多の拔ち上戸
ある〳〵平ノ師說ハ諸お多かく
あれとそれハ天竺のものヘ說ハ
ハ日本のものヘ說おハ載るハ重
中又ハよきく重を表よい苦しうて
ものを出も鳴重をうして水ニ入鶴
重をうして樹ニ上る者獸ハ重を

暑を苦まさんや況潜りて只
管を苦しむ者と心得べし　延喜
の比重藤原宮法師　是書を
ものうを毛よかさもて居森や寒
き時そのある是寒をつるむ
藤ぬぐしてのこと言書しあり
よりてこのくと言書しあり
さるもあるくは山林あるハ村
里の村百にも寒ばあやきを
を出すものゝ

鯨寒　同

鯨の形を蜂と云永例鯨庚氏鯨
とあり　艫舳ハ市を立る船をソウカイと云
此船三艘つゝ合て七十二艘出る
凡人数千八百人先鯨を見時ハ四方の

山へ遠見を立鯨者る時ハ合図の
狼煙を上る時急船一度に乾り出
て合図を待先見船ハ鯨を入立後
ハ漕ヲ出合図のシデを上るとて
網を張四　親鯨も　網一重
とまふぬ時ハ二重三重ケるとし
時一の鯨と云二の鯨と云三の鯨と云
四ハ鯨をうつ次第ハ網を
ケ岡より輪輪二十丁計
捲上るし大小ハよる　金数ヲナラシサマ〳〵ノ刃リ飛
素目きれ切よぎ出ケ外畧之凡
子を思ふ人百多歌ハ及ぶ
て鯨の子をあれむ人ハ
うたく出ケ六里ケても見親
鯨を吹時ハ大きハ吼るる達のぬく

法にもどりるを鯨の隠れあるとい
背に高き也近くに背に海苔ある舟い
海の下よかくとかくるをかぞふ
伝て見鯨に失ッ海を入る親くら
死して後見鯨を鯨も死る舟ハ西
を枕とも国に上る時よ見りて伝を
迎くて法華経読誦ありと云ふ早
右部に万是鯨を三刃まして形聖る
昔ハ弓て射るとあり古奇にい
いさかとりと清りイサナハ鯨の異
名ふ又雄ハ鯨雌ハ鯢ふと異物志
ようるくり

かるくる　同同

杜父魚是北國ニテ雪霰ノ降時取
魚也ト云續猿蓑集ニ　カクツヤ腹ヲ

並ヘテ降霰此コト書　河豚ノ大サニテ
水上三浮越ノ川ニノミ有魚也ト云　下々書
愚按此物知て特に多く亟所
まて鮒　石ブシ　ダンギホウ　雑海まて
石喰ヒ　砂クヒ　是さく本ともに法
国ふ又俗名多く一種別まくあり
らに説ありてい書うふ石
ふ　秋海鼠又海鼠多ハ杜父魚と
ふれ　石ふ　ハ源氏を以て　みとも
呼を以て海を秋とも鮒ふ雑海
の名産海魚多鮒多と採漁多き
を以秋とも多いか文のもくあられ
ふる時妙あり以て多とも

雪車　同同

雪車　雪舟也深雪ノ時旅人及荷物

ヲ載テ押引也綱貫橇（カンヂキ）ト云ハトモニ
雪沓ノ事也ト云ハ異物雪船のあんび
橇（カンヂキ）又雪沓のすりあしん綱貫ハ雪
沓し欄又反車又雪車し播州法前
百首忠房の所ハ初ちゆきはなかあ
あらしふしは旅人そりよ雪と
物首あり押引あんそりする
木まて製して雪の上をしらう形し
板なとまてハ出よりるようて車の
名あり大小あり

くんじき　同

橇（カンヂキ）カジキとふし越路まて子ソ（織田ニテ黒モニ
ミト云テ揚枝ニ製表ハモノ）といふ木を丸くたわめて
輪とし縄りてあるて中ハ革を分
て細を分る事尺ばかりまてひふ紀

ものゝ織田隆田ハ用ゆナンバの彩
太平記十八巻ニ曰里見伊賀守を大
将として新田義治五千余人を金
ケ崎後法の為彩賀（ツルガ）ヶ岳ニ向る其
勢皆吹雪の用意をして拍の具ハ
上ハ蓑笠を着し踏（ツツ）徑の上ハ橇（カンヂキ）を
履て山路八里ハ百雪踏分て二十日ハ
楽来迄よせ寄ると有又云橇
をふまさるゆ（ハ雪中ニ四五尺義
入しりと云

天武天皇御国忌　同

清涼忌ハ天武天皇朱鳥二年より
初る朱雀ハ一年にして終るあくるま
持統天皇元年ニ又天智帝を中
興とハ朝敵入鹿を誅罰し天下

を注なのみ所は中無のまとん

衣配り　同同

衣配り正月ノ料衣ヲ子孫親族ノモトニ配り賜フ事　源氏物語ナント所々ニ見エタリト云々愚按ずるに

玉づくしの巻にあり人まの著るハ方くより我もくとあをを選て減出しする法なれども集りしる所源氏もしさ紀の上と法皆ゝ引けてはるぐ〳〵配ふものゝ尼よりなりし

室蝶も今ハ源氏はじくさのひて尼の装束つくりしなりとて是忠ぶ仲今民俗仕着セ羅紗と呼て宮仕のものゝ為ハ是ハ似よりしるるなり親戚子方より送るまあり

目上より給ふるまゝ皆衣配なる

斎宮絵馬　同同

斎宮絵馬十二月卅日伊勢ノ齋宮ニ諸民詣テ絵馬ヲ掛ル其毛色ヲ見テ来年秋ノ農業ヲ占フトソ愚按古記ニ曰勢州斎宮の樹下道路のかたハ小社あり十二月卅日の夜斎宮村の土人祭るを聞るるあり

疫神　疫神をなぐもる業なりいまし〳〵天ま道云とつるは川無郡より呼るさは樹下ハ前て祭るの神ハ多てるるを疫神の眷属斎宮の樹下祭るの神と称ると云て山田の浄師ハ郭ハ土人かくゝ傳へしとぞ云ふ

和布刈神事

同

和布刈の神事の事は諸書異説多し豊前の國早鞆又隼部ノ社祭神一座火酢芹命と一説に彦火々出見の尊と出記せるも名居の額は隼人大明神と云隼人ニテ火ヲ鎮の命と鎮相法名不記皆にい毛門の玉とあり往古所門司赤間と地續き平間五百壇の関と称せり されども毛門の関ありしに皇后三韓を征罰後この所より壱里半の切戸と成五百壇も海底よりて今世子鞆は豊前の地に属せ多居より石壇海に常に二十階ばかり石壇見ゆ赤百は今下の関とて毛門の玉と門司は今豊前の地則子とも心又毛門豊浦の海住吉明神の社あり海を隔てて向に勝京の地と毎年十二月廿日の夜丑の刻南社の神人松明をかゝげて双方一対に彼石壇をあゆる漕左右にひゝく由南方の神人鼓の少ゆる斗に成和布を一ト鎌刈る自然と得て二鎌に及ぶ漕に溺るゝと云傳に南社の神秘なるゝ先世の刻前に諸あゝく立と也其時南社に炬火の光り見ゆると社頭及び海上のかゝり船の灯をゝく消すと海底も動くんと地も沈波皆く静まるとあんとうとして又

蒲海と米苅とする稱海藻ハ元和
苅社の祢代とする平所ハ
あるさるゆ（南國の男人ハふるく求
て大成ハあるハ）つ茶り

吟茶　同

かき茶　嗚茶と濁る（是ハきり茶
といふハ同）嗚といふハ世古の称名
是茶屋の始茶なり

手姫　同

手姫といふハ上林及び平井清茶
師の門室をつゝ茶園ハ出て擂
ゆるとこゝ此日その家て茶祝せる
るゝ是より後下婢の手業なり
南京のまねめ試のこの茶こゝ
陶器ハ京師幾内及び諸國茶屋

の好士の方（送る）ゝ茶嗚茶と云

新茶　古茶　同

数寄者ハ四月八日より風爐を出
ゝ是よりして新茶古茶の名あり
三夏ハ涼る

夏切茶　同

六月ハ出る夏切茶といふハ炎夏に
用ゆ宇治信楽より出るを茶ゝ風
炉に用ゆる時ひ茶より後製
ゝ夏日ハ茶を切て用ゆるゝ

秋茶　同　同

朝露艸　活法五月夏菊ノ下ニ出ス
此名アルモノ本艸其外花史艸史ニ
ミエズ夏菊朝菊朝露艸ト出シメレハ
夏菊ノ属ナルベシト雖モ墨物秋茶ハ

一切の花史ナミエズ夏菊ノ属ナレヘシ
とハいてのみ杉遠せり一名浪淺花
下学集にハ錢朝露艸と出ヽり花の
めゝち椿ヨ似て小く白きくうゝ
あり底に黒紅のきわひみ葉ハ三ツ出
五ツ出あり西仙の葉ヨ似ゝり高サ二
尺斗枝あり秋ヨ咲きて冬ヨ萎し

木兎　同同

木兎猿蓑集冬季ニ三ツクノ
發句アリ此モノ季ニ用ユル沙汰
ナシ猿蓑ハカリ也一句ノ趣意ニトラ
ヘ所アツテ冬季ニ成シ入うレメル モノ
カ曙抄猿蓑集尾の芥境ゞ句
冬の部「木兎や扨もひ切る音の
ゆゝ」此句ハ下の雑部の芭蕉門

俳諧古今抄新例の式冬の部ヨ曰
古抄ハ秋の部ヨ入レタレト海名ヨ
あゝ名ヨるヨあゝ増て明部
の部ヨ書きハ冬ヨ成ル所ヨ
拘ゝ二季の加減とハ古抄名
の準用と云ヨ冬と定む「とみ
下器猿蓑集ヨミツクの句冬ヨ入ハ
蕉門の法ニ正しカラヌヨ
る所なし」とハいフ推一汎ハ通
俗志ヲ以て秋とス是古抄の通り
ヨてこさ氏

同同

スヾコサス春也春ニ至ツテ鷹ラツカ
フニハ鷹ノ鈴ノ鳴ヌヤウニ鈴ノ口エ
子ヲサス也是鷹匠ノ故實也ト云々愚
按鷹ノ鈴のゆゝあゝとハ鳴れと

も於の口へ子をさしたるとハ何のゝをさしてゝるやいぶし温故日録曰鈴籠指(サス)ゝ鳴るを防ぐ守する所廣に於のこゝて生る物人所廣るゝ限れり於り明れハ雞ゝ知る所ゝ籠ゝ去ふせ(ゝ)ゝるゝ椀(カヾ)を細ゝてさしたを於のことゝいふゝ定家の注ゝ見へゝりとゝ云ゝ又一書ゝいのこゝろの菓(クキ)をすゝもいふゝ於ゝ木をさしたゝるゝ

初庚申　同

庚申待此神を知るゝ上古よりのゝるゝ則神と云ハ猿田彦の命ゝ元此神を知るゝ庚申の日を用るゝ日蓮ゝ平余の秘書ゝ安(ヤスヲ)公にも出るゝあり又原の順庚申を知る於ゝ

「風濤中の得ゝる方なき物船ハ蟹や先立ッ魚や先立ッ」是庚申を知るゝ

清涼山下の句猿田彦(うゝ)鈿女二神の同義を祈ゝり又攝州四天王寺廣堂ハ神祇青面金剛童子人王平二代

文武天皇大寶元年正月初て庚申ゝ日出現公にも祈ゝ初て知ゝり諸國幸神(カウシン)の本地ゝ六十一年目庚申年正月に風帳常に拜ゝるゝ不叶年中庚申の日胃(ヨヒ)庚申ゝて西日の条信近國ゝ集る其神信一山の秘説ゝ見ハ器之庚申のゝ日本ゝてハ神道神祇も此所ゝ儒家佛家ゝ共ゝ

毘沙門功德經　護纏輪

毘沙門ノ功德經昔元曉ニ陰陽師
都下家々ノ門ニ高声ニ其功德ヲ
唱フ大畧佛說毘沙門天王經ノ金銀
無盡福德壽命無量ノ說ヲ述ル
ニ似テ後ハ俗語ニ當時目出度コトヲ
集メ云イ立シ一說ニ先禁裏日
華門ノ外ニ來唱フ之ヲ後都下ヲアル
リキシト云々今ハ凡テ絶テナシ

○惠美酒　同

若惠美酒是江戸ニテ福神雙六
ヲ賣コトク元日夷ノ像ヲ畫メルヲ
京師ノ家々ニ投テ初尾錢ヲ取
シナリ近キ頃マテ有シカ近年
ハ絶テナシ

○惠久　同

懸想文賣是モ陰陽師赤キ袴ニ
立烏帽子シテ女ノ嫁スヘキコトナン
トヲ祝シ記シテ元日寅ノ時ヨリ
京師ノ町々ヲ賣アリキシ也是
等ノコト今ハ皆絶メリ

○船玉　同

船魂祭ル元日船ニ松飾シテ
其神ヲ祭ル也船ノ神本朝ニテハ
猿田彦ノ命則船玉ノ命ト称ス
歌ニ幸玉トヨミ手向ノ神ト云モ是
ナリ

○淑氣　同

淑氣早春ニメツ一氣也千門
淑氣新也ト詩ニモ作レリ

○松竹　同

ヲサガリ三ケ日ノ雨ヲ云御降也

寐ノむ

イ子ツム寢也イ子アクル起也三ケ日ノ寐起ヲ云

初子日

初子ノ日初春ノ初子ノケフノ玉箒ナント云歌アルニツキ是モ歳旦ノ部ナトヽ心得タル輩アリ不宜

初子ハ正月上ノ子ノ日也凡テ子ノ日ストヽ云フハ原野ニ遊ヒテ若菜ヲ摘ミ小松ヲ曳ヲ云也是正月ニモ不限圓融院ノ紫野御子ノ日ハ寛和元年二月十三日源氏若菜ノ巻ノ子ノ日ハ正月廿三日也然レハ初子ノ日只正月ノ季也

初寅参り

初寅参正月上ノ寅ノ日洛ノ貴賤鞍馬寺ニ詣コト也

ゆこ地ろ

正月上ノ寅ノ日鞍馬ノ山人燧石ヲ賣ニ参詣ノ道端谷ヲ隔テタル高キ岡ニ小屋ヲ造リ居リテ其小屋ヨリコナタノ軒キ岸ヱ綱ヲ引ハエ其綱ニ小番ヲ付テ待参詣ノ諸人錢ヲ番ニ入レハ則番ヲ引上ケ錢ヲ取テ其代リトトノ燧石ヲ入レ番ヲヲロス是ヲ鞍馬ノ番卸ト云フ甚タ興アルコト也

袁白ノ連歌

裏白連歌 正月三日北野ノ社司松梅院ニテ毎正月興行ノ連歌也中古執筆誤テ初面ノ次ヲ白紙ヲ置テ書リ其誤流例ト成テ今ニ其片面ヲ除キ書ス依テ裏白ノ連歌ト云

人日　同

正月七日ヲ人日ト云フハ元日ヨリ六日迄ヲ六畜ノ日トシ七日ヲ人ノ日トス六畜ヲ先ニシテ人ヲ後ニセルハ賤キモノハ易生貴キモノハ難育トシテ人ヲ重ンシタル意也トリ

箕面詣　同

箕面ノ富突正月八日朝寅刻ハ

攝州豊島郡箕面山瀧安寺辨才天ノ富也諸人此富ヲ突テ天福ヲ祈ルニ其應響音ノコトシト云々

つなぎ　同

綱曳正月十五日大キナル綱一條ニ大勢取付キ雙方ヱ引アヒ勝負ス京童ノ正月遊也

獅子頭の神事　同

獅子頭ノ神事正月十四日ヨリ十七日ニ至ル伊勢外宮ノ御神事也

厄神祭　同

厄神祭リ正月十五日ヨリ十九日ニ至城州八幡ノ厄神ヱ都鄙ノ男女群参ス此日ヲ女節分ト云

毎十二月晦日京師ノ俗吉田ノ厄神ニ祭リテ厄ヲ祓フ大晦日カマヒスシケレハ婦女ハ不詣依テ此八幡ノ厄神詣大晦日ニ勝趣意ニテ女節分ト云也

野大根

野大根相州ノ波多野大根江戸ノ俗ハタナト稱ス摂州天満ノ細根大根是也早春專出之元野生ノ物也

木地炉ふち

木地爐縁茶人用ニ爐縁ニ爐開ヨリ冬ノ中塗縁ヲ用ユ春ニ至テ木地ノ縁ニ仕替ル也茶人曰春ハ陽氣強ク爐ノ内ヨリ白灰ヲ吹上ル故ニ塗縁ニカヽリテ見苦シ依テ木地ノ縁ヲ用ユ是茶道ノ故實也他説モ有レト此説宜シト云々

東福寺ふちんわく

東福寺懺法二月上ノ午日観音三十三身ノ像ヲカケテ法華センホウヲ行フ

水閑寺初午

水閑寺初午泉州也人皇四十五代聖武天皇二月初午ノ夜夢ニヨツテ行基ニ命シテ和泉國ノ山中ニ救世大士ノ尊像ヲ得玉ヒ此寺ヲ開基シ玉フ依テ今世ニ至リ初午ノ日ヲ縁日トス其余ノ初午ニ観音詣ヲ倣之ト云々

柱炬

同

嵯峨ノ柱炬二月十五日ノ夜清涼寺釈迦堂ノ前ニ二丈ハカリ大炬ヲ三ツ立テ火ヲカケ其燃立半ヲ打倒ス松明ノ燃ヤウ倒レヤウニテ農家ノ幸不幸ヲ占フ也

積塔

同

積塔二月十六日座頭ノ行ヒ也毎二月洛ノ高倉綾ノ小路清壽庵ニ座頭會シテ十宮神ヲ祭ル是往昔光孝天皇ノ皇子兩夜ノ親王盲人ナリシカ薨シテ後諸ノ座頭其墓ニ毎年積石ヲ吊ヒ祀シ遺風也トリ此會ニ諸國ヨリ座頭上洛シテ位階ヲスヽム

多宮ノ祭

同

圓宗寺ノ最勝會。十九日ヨリ廿三日ニ至今此會式絶テ寺トモニナシ漸ク御室仁和寺ノ境内ニ其寺跡トテ名ノミ殘レリ

淺間祭

同

淺間祭二月廿日是ヲ活法ノ書ニアサマ祭ト云ヘリ不宜駿州府中ノ淺間祭也本宮新宮二社也凡吉田口大宮口蹉走口皆淺間ノ社ヲ祭ル其中ニ府中ノ淺間大社也木花開耶姫ノ命也瓊々杵尊ノ妃大山祇ノ命ノ女又神社考ニ記セル富士淺間ノ説ハ甚奇異也事繁ケレハ畧ス

国立公文書館
National Archives of Japan

春ノ鷹佐保姫鷹サホヒメカトモ云
春神ノ氣ヲ受ケルト云ニテ佐保
鷹ト云トリ

白尾たか　同

白尾繼尾ト云ハ凡鷹ハ冬ノ氣ノ
モノニテ春ニナレハ山ニ帰ル氣アリ
依テ春鷹ヲツカフニハ白鶴ノキ
ミニラズト云羽ヲ以テ鷹ノ尾ニ
繼キテツカフ也已カ尾ノ白キヲ見
テ雪中ノ心有テ山ニ帰ル心ナカラ
シメン為也依テヨク遣ハルヽト也

きゝす　同

キヽス工鳥　鳴鳥狩　泊リ山泊リ狩
皆雉子狩也前夜其鳴所ヲ能
ク聞スエテ翌朝行テ狩ル也依

テ朝鷹トモ朝狩トモ云俱ニ春
ノ雉狩也

松もり　同

松もり鳥　京師ノ小鳥肆ニテ尋ル
適アリト云菊イメヽキ類ノ小鳥
也甚獵ヤスクシテ籠ニ難肩トリ
藻塩艸ノ歌ヲ考ルニ菊イメヽキ
様ノ小鳥ト云モノサモアランカシ

陽炎　糸花　同

陽炎糸遊同物二名也春氣地
ヨリ升ルヲ陽炎或ハカケロフモエル
ト云ヒ升テ空ニチラメキ又降
ルヲ糸遊ト云也句ニ結フニ可得
其意ヲ遊糸イトアリブナドヽハ或
ハカヽメク又無骨ニ聞ユ

蟶

蟶長サ二三寸指ノコトクナル貝也
又竹蟶ト云アリ貝ニ節アリテ
竹ヲ切タルカコトシ

蜷

順和名抄ニ河貝子河螺也俗蜷ノ字
ヲ用ユ非ナリト云々徒然艸ニモミ
ナムスヒト云ハ糸ヲ結ヒ童子タルガ河貝子ト云貝ニ似タレハ云ト或ヤウニト
ナキ人仰セラレキニナト云ハ誤
也ト書リ

もろこ

モロコ湖水ノ小魚也長三寸ヲ限
トス鱗ニ光有テ美魚也其味腦
多湖水佳品ノ内也江西坂本ニモ
ロコ川ト云アリ此魚最多シ故ニ名
トス大和本艸ニ曰西州ニモロコアリ
油身魚ト云ト記セリアブラメハ其
鱗鮠ノモニ似テ鮠魚ト云リ大サ
七八寸其味甚タ下品也トリ是
モロコトハ大キニ異也大和本艸ノ説
不合又モロコハ黄鯛魚ナルヘシナド
云リ是モ違ヘリ黄鯛魚ハワタカコ
也江州ノ俗ワタカト云大キ成モノ
七八寸尺アリ是モ湖水ニ甚タ多シ
モロコハ三寸ニ不満大小ナシ凡此
モノ湖水ニ多ク有テ早春子ミツ
ル事他魚ニ勝レテ腸ナシ
依テ衆子也然ルニヲメマキ等ニ
鮒ノ字ヲ用ヒヲケリモロコハ俗称也

○少モ

此文字イブカシ捻シテ此魚ヲソラク他州ニ在ヘカラス江湖ノ産魚也

りくこ　同

黄鯛魚ハワタコ也江州ノ俗ワタカト云大キ成モノ七八寸尺アリ是湖水ニ甚多シ又モロコハ黄鯛魚ナルヘシナド云リ違ヘリモロコハ三寸ニ不満大小ナシ

柳葉魚　同

モロコ湖水ノ小魚也三寸ヲ限トス鱗ニ光有テ美魚也又柳モロコト云一種アリ活法ノ書ニ柳ノ葉魚ト出セルモノ是ナルヘシ形モロコニ少モ違ハズシテ脊黒ク腹ニ黒筋有テ柳ノ葉ノ如シ凡此モノ湖水ニ多ク有テ

早春子ミツル事他魚ニ勝レリ

鮒のるとる　数子　同

鮒ノ子取数ノ子也和名カド大サ尺ハカリ似魚コノシロニ似テ脆甚多ク下品也其子他魚ニ勝リテ大粒ニシテ聚リ連ル依テ数ノ子ト称ス其名ミツイテ歳始婚家用之為祝春

此魚西南ノ海濵ニ決シテナシ南部津輕蝦夷ニ最多ク一網ニ獲数万トソ冬ヨリ春ニ至テ毎年聚之

椿　同

椿芦環等ノ書ニ玉椿ト記セリ玉ハ賞美ノ号ニシテ椿ノ名目ニハアラス白玉椿ト云モ其麗ヲノ義ニテ玉ノ字ヲ冠ラセタル也玉ツハキト云モノ正木

ノ類ニアリ又ツラク椿トモ椿ノ
名目ニアラスツハキノ多ク咲列リ
メルヲ云也扨ツハキノ正字ハ海石
榴及山山茶花也延喜式ニモ海
石榴ノ字ヲ書リ順ノ和名抄ニ椿
ノ字ヲ記ス椿ハ別物也誤レリトリ
然レトモ今世俗皆椿ノ字ヲ以テ
通用ニ來レリ俳諧ハ殊ニ通俗ノ
字宜シ又芦環ニ椿トハカリハ雜
花ハ春ナトヽ記セリ非ナリ椿ト
ハカリ春季勿論也梅桃ニ同シ
花アシテフニ不及

○ゆ[illegible]

若紫紫艸ハ元ト山艸也今諸
國種之深艸トス奥州遠州

豫州ヨリ多ク出之若紫ハ其苗也

○寒食　同

寒食清明ノ前二日清明ハ三月ノ
節也冬至ノ後一百五日ニ當ル日也

○薪能　同

二月堂ノ行翔日ヨリ至十四日南都
東大寺ノ諸堂ノ内ノ大堂也本尊
観音毎二月大法會ヲ修シ霊符
ヲ出ス此法會ノ内七日ヨリ十四日
薪ノ能アリ天晴ル夜興福寺
南大門ノ芝ノ上ニ如山積薪焼之
其焔光如晝今春金剛宝生ノ三
座年廻リニ上洛シテ勤之諸人群
集ノ見物ハ腰掛ヲ後高ニシテ
ヒ見之南都ノ衆徒ハ帽子ヲ被

半賢袴ヲ着シ立ナカラ見之

二月堂ノ水　同

二月堂ノ水取。七日南都東大寺ノ諸堂ノ内ノ大堂也。堂ノ前ニ石井有リ甚タ浅ク常水一滴モナシ二月堂行法ノ内朔日ヨリ七日ノ間加持修法シテ井ニ向テ若狭々々ト呼時石井ニ忽清水涌キ出ル潔々濤々タリ是ヲ以硯ノ為水彼天符ヲ印ス古今奇ト云是若狭國遠敷大明神ヨリ二月堂ノ観音ニ献セシメ玉フ水也ト云々代々國史等ニ載ス

礼拝講　同

禮拝講三月十二日三日両日江州日吉八王子ノ神前ニテ行ル天台礼拝講ト称ス

石清水臨時祭　同

石清水臨時祭三月中午ノ日南祭ト云名高キ祭礼也天慶五年ニ始ル是スキニシ年此御神ノ以御威勢ヲ將門カ乱ヲミツメ玉シ御報賽也ト云々

御身拭　同

御身拭三月十九日嵯峨清涼寺ノ釈迦佛ノ身体ヲ白布ヲ以テ拭ヒ其布ヲ参ノ詣ノ諸人ニ授ケ守袋或ハ数珠佛ト云

御影供　同

御影供三月廿一日ニエクウトモ云弘法大師ノ御忌也洛下東寺

又高雄ノ神護寺御室仁和寺
ニテモ此日行之

麥鶉（アイフヒヽナキト題分ベキカ 追テ考ヘキ事）　同

麥鶉春卅麥ノ中ニ子ヲ哺スル
鶉也アイフトヽ云ハ鶉ノ雌ヲ云也
雌ハ轉ナシ子ヲ哺スル時鳴クヲ
ヒヽナキト云也

通草（ムベ）　同

通卅ノ花紫色也又白花ノモノ
有リ蔓也花ハ春實ハ秋也此類
ノモノハ花トコトハラ子ハ春季慥
ナラス

庭梅　同

小梅ノ花是幾内江東ニテ庭梅
ト云モノ也花甚タ小ニシテ梅花ノ
形アリ色淡赤實ハ梅ニアラス櫻
ノ實ノ少シ大キナルモノ也櫻ノ實ハ
熟シテ黑シ庭梅ノ實ハ熟シテウ
ス赤シ小兒好ニテ喰之是大和本卅
等ニ出ス山櫻桃也

庭櫻　同

庭櫻櫻ノ別種ニシテ小樹也花葉
櫻ニ甚タ小也又糯櫻ト云アリ一
類也庭櫻ハ花ウス赤ク糯サクラハ
花純白也

ゑんびは　同

似テ

化偸卅葉ハ車前卅ニ似テ櫻桃ノ
如ク元トニ皮ヲヲヽエリ莖ヲ抽テ
春花ヲ開ク肉紅色或ハ柿色淡
黃ノモノ今ア庭院ニ植テ受之白花

金風ト　同

金鳳花一名毛茛又鬼ノ田芥子ト云大毒艸也葉ヲモミテノスンロニツクレハ火燎ノ如ク忽フクレテ瘡ヲ截ス石龍芮ト同事也春小黄花開リ甚光澤アリ千葉ノモノ猶可愛

うつぶき　同

雞頭實ノ花又芡實ヲニバスト訓ス花苞ノ形雞ニ似テ葉ハ蓮ノ甚大キナルモノ也葉ニモ莖ニモ毛刺有所々古キ池ニ多シ攝州昆陽ノ池ニ一面ニ有之花ハ春ミツフキトハカリハ異也

せんまい　同

ゼンマイ　紫萁センマイト訓狗脊ハ別物也センマイニ非ス然レトモ俳諧ニハ人ノ遍ク知来ル文字モ宜シ

虎杖拔　同

虎杖競　四月朔日貴船ノ御神事也此日加茂ノ氏人騎馬ニテ詣ス帰ル時市原野ノ連理ノ芝ト云所ニヲイテ虎杖ヲ爭ヒ取リ其大小多少ヲ論ス例年ノコトニテ甚興也

山崎日の使　同

山崎日ノ使　四月三日是山崎離宮ノ神人年番ニテ八幡ヘ参ル其役ニ當リタル人ヲ日ノ使又日ノ長者ト云也年中行事ニハ幡ノ日ノ當ト云是也

[illegible]　同

鷹鳥屋ニ入ル鷹ハ四季ニ在テ冬ニヲ
第一トス暮春ノ頃ヨリ毛ヲ易ルニ
ヨツテ其間ハ鳥屋ニ籠メ置也是
ヲ鳥屋鷹ト云鷹ノ餌忘ト云モ
此時ノコトニテ夏季也

花供　同

高野ノ花供四月廿一日非正花大
師ノ衣ヲ取カヘラルヽコト也

松前　同

松前ヘ渡ル是北海ハ冬春風波ア
ラク渡海ニガタシ故ニ南部津輕等
ノ商人四五月ニ至海平カニナリテ
松前ヘ渡リ産物ヲ交易シ其荷
物ヲ運送シテ秋ニナレハ徐々仕
廻イ帰ルヲ上ルト云也依テ渡ル上
ルヲ夏秋ノ季トス

梅雨　同

梅天和清ノ天四月ノ天至テ清和ナ
ルヲ云也梅月梅潤トモニ四月ノ異
名也五月ハヤ梅ノ子熟ス也四月
梅子ノ青々ト盛ニナルニ天氣相合
ヲ以テ梅天ト云トソ

ほうちやく　同

ホウチヤク此卿園史卿史ニ不載
俗狐ノ挑灯ト云モノ是也トソ莖ノ
高サ一尺ハカリ葉ハ野車ニ似テ少
ト細シ白花ニシテ内ニ青キ彩堅ニ
三條ハカリ有花垂レ咲テマコトノ
宝鐸ニ似タリ江東原野ニ多シ

国立公文書館
National Archives of Japan

ワクラ葉病葉也ワクラハシキ葉
ト云畧也若葉ノ時紅葉シタルモノ
タマノヽ有リ是病葉也又拾ヒテ
ノ嫩葉ヲ云トモイヘリ歌ニワクラハニ
問人アラハト讀ルハ懶迫或ハ不慮ト
書リタマサカ不慮人ノ問ハヽト云
意也一説是モ右ノワクラ葉ヨリ
出タル詞也トソ多葉ノ中ニタマサ
カ恩ヒカケス紅葉シタルモノアレハ
是ニヨリタル詞也ト云々

美人草　同

美人艸槲葉ノ別種ニメ小ナルモノ
花四瓣紅白千葉單葉數種皆
愛スルニメエタリ虞美人艸ト称ス

ゆ多ま　同

鷹　仙花黄ニシテ山吹ニ似タリ
花ヒラ末鋭ニテ鷹ノツメノ如ニ葉
ハ柿ノコトク木ハ連翹ニ似タリ年
々梢ヲ出シテ花繁ク咲リ浪花ニ多

山ちさのき　同

山チサノ花賣子木ト名ヅク艸ニ
アラス高サ五七尺山中ニハ大木アリ
葉ハ柿ニ似テ尖レリ四五月焦タル
紅色ノ花ヲ開ク

岩梨　同

岩梨畿内江東ニテイバナシト云
山中岩ノハザマニ生ス苗ノ高サ二三
寸地ニ布テ生ス三四月葉ノ間ニ子
ヲ結フ楊梅ノ如シ其味甘酸ニ小兒
好ニテ食ス

行とる　同

葭原雀本名鶺鴒ヲゲラヨミムシリ
キヤウ〳〵ヨミ雀トモ云其声甚喧
シテ昼夜鳴六月土用ニ入即止声ヲ
かぐめ　同

蝦蟹ノ属ニシテ甚タ大ナルモノ
也前ノ両脚長キコト尺餘身ハ五
六寸甲アリ雌子ヲ生ス蟹ノ子
ノ如ク殼ノ外腹ノ下ニアリ卵也活
法ノ書ニ龜ノ字ヲ用イヲケリ龜
ハウミカメト訓ス書違ナルヘシ
鳴舌を去　同

鴫鴿舌ヲ去ル此鳥ヲタマキニヌエト
假名付セリ非也トソクヨク鳥也本
艸ニ鴫鴿鸛鴿トモニクロツグミト訓

五月

五月五日其舌ノ尖リヲ去レハ則
能ク人語ヲナス聲尤清越也ト云々
鸛鴿ハ唧々鳥也トモイヘリ鴫ニ
アラス能其出所ヲ可見
左近の荒手番　同

荒手番騎射也江次第三日五月五日
天子豊樂殿ニノ騎射叡覧作射礼
公事ヲ真手番荒手番ノ式アリト云々
是則禁庭於左近ノ馬場射騎ヲ
云也左近ノ荒手番三日
右近の荒手番　同

右近ノ荒手番五月四日
左近の真手番　同

左近ノ真手番五月五日
右近の馬場の荒手番　同

右近ノ馬場ノ真手番五月六日也
此日ヲヒヲリノ日ト云近衛ノ隨身
射ニ着スルトコロノ褐ノ尻ヲ引折リ
テ着ル依テ六日ノ騎射ヲヒヲリ
ト云引折ノ畧也

江聲愚按右ノ如ク四日トモニ題ノケ条ヲ挙ケヘキカ活法諸書多クハ別チナシ又左右ノ荒手番左右ノ真番トニ題ニ分クヘキカイツレ日限別日ナレハ四ケ条ノ方然ルヘキヤ

印地打　同

印地打五月五日壮士兒童東西ト立
分チ小石ヲ打アイ小弓ヲヒイテ戯
ニ闘爭勝負スルヲ云也昔武門ノ
兒童ニ軍場ノ駆引ヲ習ハシムルヨリ
始江東佐々木ノ社ノ祭礼五月
五日今ニ印地歩アリ

棟ノ佩　同

棟ノ佩五月吾是邪氣ヲ祓ハシタ
メニ棟ノ枝葉ヲ腰ニ帯巻也ヲヽチ
ノ字棟豆ニ樗ハ別物也トソ

茅巻見　同

花ガツミ是昔ヨリ論アルモノナリ
凡ソカツミトヽフハ蔣ノ捻名也其中
ニ菖蒲真蔣ニハ花ナシ蔣ノ類ニ
テ花アルモノ即花カツミ也花アヤメ
カキツハタ花シヤウブ等皆花カツミト
云ヘシ

さるとりの花　同

サルトリノ花菝葜サルトリイバラ也
山野ニ多ク生ス葉ハ柿柿ニ似テ刺
アリ筑紫ノ俗カメイバラト云トソ

たもつけ　同

緒線菊（シモツケ） 木ト艸ト二種アリトモニ五月紅花ヲナス真紅淡紅アリ真紅ノモノ可愛花ノ形ハミジンノ如ク集リ咲元ト山生花ヲ愛シテ今ニ庭ニ植ル

まゝこび 同

天葵ノ四五月白花ヲ開ク梅花ニ似リ好事ノ者葉ヲ去リ瓶ニイケテ翫フ恰（モ）如（シ）梅花ノ一箋梅ト云也其實一藤ノ内ニ数ノコトクナルモノト又扁（ヘン）モノト両實有依テマタ〻也ミトビト通音勿論也

さきつゝけ 同

早松茸 皐（サツキ）月ノ松蕈（マツタケ）也五月ニ出ルモノ、サナカラ秋ノマツタケニ形モ香モ違ハサルモノ有リ又形ハ少モ違ハスシテ香且ツテナキモノ有リ是別物ナラン不可喰（クラ）トソ

さつきつゝじ 同

皐月躑躅（ツツジ） 五月ニ咲クツ〻シ也俳諧サツキトハカリシテ通ス文字ハ杜鵑（ホトトギス）花也花トモツ〻シトモ断ルニ不及

美容柳のこと 同

美容柳ノ花一名金絲桃花ハ桃ニ似テ黄也梅雨ノ中ニ開ク葉ハ如柳ノ其花心ニ黄鬚アリテ花外ニ鋪ク金絲ノコトニ俳諧ニハ柳ノ字ヲ云ニ及ハス只金絲桃（ヒヤウ）トモヒヤウノ花トモスヘシ

つゝ花 同

津走是鰤ノ至テ小ナル時西土ノ方
言ツハス也關東ニテワカナゴト云フ
秋一尺ハカリナルヲ西土ニテメジロ二
尺ニチカキヲ鰤ト呼フ紫ニテ
ヤスト云イ東土ニテハイナメト云フ
中冬ノ頃ヨリ長ニテ三尺最大キ
ナルハ四尺鰤ト名付其肉ヲ曝乾
タルヲ鰤ノ鮨ト云凡此魚少キヨリ
老ニ至テ名ヲ改出世昇進ノモ
ノナル故ニ貴賤歳末年始ノ嘉
祝ニ用之初江海ニ在テ徐大洋
ニ出東北ノ海ヨリ西對州ニ巡リ至
ルトリ對州ヨリ又中華ノ海ニ入モノ
甚タ大キク甚老ス依テ老魚ノ
名アリ師魚ノ文字ヲ用ルモ此

意也ト云々

座頭納涼　同

座頭ノ涼六月十九日是座頭ノ行ヒ
也遊樂ニアラス涼ミ積塔トテ二月
十六日ト今日執行之是又雨夜
ノ親王ノ母公追福ノ遺風也トリ

御手洗詣　同

御手洗詣六月十九日ヨリ廿日ニ至
下加茂ノ社ニ貴賤群詣ス紀ノ涼
ト云則是也ナゴシノ祓アリ

天満ノ御祓　同

天満ノ御祓六月廿五日大坂天満
天神ノ祭礼也當社ハ村上天皇ノ
天暦年中奉詔ヲ菅神ヲ勸
請スト云々毎六月廿五日戎嶋ノ御

旅所ニ神輿ヲ出ス其行還川
船也數万ノ挑灯群集ノ遊船亦
比類ナキ壯觀也昼ノ内地車囃
物假山狂言種々アリ此祭礼ヲ
軽樂ト称ス世俗戯舞ニダンジリ
マイト囃スコトアリ此祭礼ヨリ出
タルナラン

○あらづけ　同

奈良漬是其漬ケルヲ云句ハ莫
只名目ハカリハ無季也

○さきくさ　同

鷺草ニ種アリ水中ニ生メ葉石
菖ノ如ク少短ク嫩ニ葉ノ中ニ莖ヲ
抽テ莖頭ニ白花ヲ開クサナカラ
小白鷺ノ如シ又一種ハ苗葉一面
ニ地ニ付テ小白花ヲ開是又白鷺
ニ似テ右ノ花ヨリモ小也好事ノ
者芝ニカヘテ植之依テ是ヲ鷺苔
トモ云芝ヨリモ潔

○狐の尾　同

虎ノ尾夏白花ヲ開キテ作穂
獸ノ尾ニ似タリ紅白相交ルモノアリ
又秋緑花ヲ開キテ葉厚キモノ
アリ又忍冬ノ類ニテ無花ノモノ有
皆虎ノ尾ト称ス

○風蘭　同

風蘭不用土ヲ木ノ枝等ノ日蔭
ニ釣リヲキテ能生立風ヲ好テ茂
盛ス依テ名トスソノ花葉蘭ニ
似テ小也五六月開花微香アリ

蘭ノ香ノウスキモノ也

○ うるゝ草　同

釣鐘艸花紫色下ニ垂レテ鐘ヲツルニ似メリ又白花淡紫ノモノアリ葉ハ如ニ牡丹ノ

○ 葛のゝ　同

葛ノ花本艸其外艸史ニ七八月ト記セリ然ルニ本邦山間ニアルモノ皆夏花アリ漢和土地ノ異ナラン活法ノ書八月ニモ葛ノ花ヲ出セリ按ノ葛ヲ秋ニ用ル八葉ノウヘナリ

○ 毛茸　同

毛茸是春也活法ノ書夏季ト入ル夏盛ニアルモノナレトモ其初ヲ季ニ用ル勿論也

布穀 俗云つゝどり 五月より七月迄鳴

右鳥の寫生別に有 縮圖かくて寸法

を為記 尤よしとする

雄寸法

頭より尾先迄一尺程 胴の丸さ

七八寸 但両翼をすぼめ羽根ともめくりなり 片

翼八九寸 嘴広い大きさ 山雀位 脚八

寸 痩て小さし 尾羽根より先

を六七寸 尾も羽も 指爪より

脚より合せ見れば 長く大きし

足爪三本後三本 但 右足の爪三本左廻り

右も 後の

三本も爪三本と同 左の足も同

雌雄同爪 脚 尾

胴寸法同 鼻孔 詰り 長く丸き

小孔なり 雄は鳴き 雌は鳴かず

全脚 尾 柿色 黒斑あり 雄は黒色の全脚

十幹異名　尔雅

閼逢甲　旃蒙乙　柔兆丙　強圉丁　著雍戊

屠維己　上章庚　重光辛　玄黓壬　昭陽癸

十二枝同　同

困敦子　赤奮若丑　攝提格寅　執除卯

大荒落巳　敦牂午　協洽未　涒灘申

作噩酉　閹茂戌　大淵献亥

春秋左氏伝閏月ナキハ必ス失ヤ是ヲ又ヘキ事ト但春秋ハ四百四十余年ノ記録ノ日ニ中庸三ヲヘハ十ヲ経タニ一ヶ所傳文二ヶ所アリ

樞ノ花　信州陣屋ノ庭前ノカヤ三月末花咲

寫生中村正時哉寒國故然ルヤ水仙モ三月開正時ハ樞ハ冬咲ヘキ者ヤ

国立公文書館
National Archives of Japan